C O N T E N T S

VIEW21

［びゅーにじゅういち］

2009 Winter 冬号

中学版

300 Since 1979 VIEW21 創刊300号

創刊300号記念特集

中学校教育のこれまでとこれから

巻頭カラー綴じ込み 表
中学校教育60年間の歩み

巻頭カラー綴じ込み 裏
社会背景と共に振り返る中学校教育

1 インタビュー 中学校教育の不易は「思い出づくり、夢づくり、人づくり」
全日本中学校長会会長／東京都港区立御成門中学校校長◎壷内 明

4 調査分析 データでひも解く中学校教育の30年
ベネッセ教育研究開発センター教育調査室長◎木村治生

12 インタビュー 社会の転換期にある今こそ新たな教育システムの構築を
政策研究大学院大客員教授◎永井順國

16 インタビュー 中学校教師に求められるのは多様な変化に対応できる世界観
早稲田大大学院教職研究科教授◎油布佐和子

20 私の指導エピソード 「挑んだ！ 越えた！ あの瞬間」

20 一人ひとりと向き合う大切さを教えてくれた「アメ玉事件」
東京都足立区立上沼田中学校校長◎森永徳一

22 労を惜しまず、生徒と一緒に授業をつくる
長野県長野市立柳町中学校教諭◎新井 仁

24 時間がかかっても待ったことが 生徒を一歩、大人にさせた
静岡県掛川市立栄川中学校教諭◎鈴木一由

26 生徒と向き合う苦しさの中で、私を変えた先輩の一言
宮城県仙台市立山田中学校教諭◎佐竹朋子

28 独りよがりの「サービス」に酔っていた新任時代からの脱却
岡山県岡山市立岡輝中学校教諭◎西村誠博

30 大学生が語る 心に残る恩師の言葉

33 最北最南の中学校を訪ねて（カラーページ）

33 北海道稚内市立宗谷中学校

35 沖縄県竹富町立波照間中学校

連 載

37 教える現場、育てる言葉
文学座附属演劇研究所 人に興味を持ち、人の話を聞くことが俳優としての第一歩

40 明日から使えるICT講座
第4回 情報モラル教育 メディア教育開発センター教授◎中川一史（ひとし）

42 10代のための「学び」考
外村 彰 （株）日立製作所フェロー 日本学士院会員◎壁に突き当たったときの“原因探し”や“謎解き”が研究の醍醐味

44 バックナンバーとウェブサイトのご紹介

本文中のプロフィールは
すべて取材時のものです。
本誌記載の記事、写真の無断複写、
複製および転載を禁じます。

中学校教育のあるべき姿を これからも考えていきます

株式会社ベネッセコーポレーション
教育情報部部長
原 茂

『VIEW21』中学版は、前身の『進研ニュース』中学版創刊（1979年）以来、全国の中学校の先生方に支えられ、今号で300号を迎えることができました。心より御礼申し上げます。グローバル化社会や知識基盤社会と呼ばれる現代社会の中で、小学校と高校の間に位置する中学校教育はどうあるべきか、そのために中学校は何をすればよいのかを、これからも全国の先生方と一緒に考えてまいります。微力ではございますが、中学校教育の発展に少しでも貢献できるよう努力してまいりますので、よろしくお願い申し上げます。

http://benesse.jp/berd/ 本誌記事は、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトでもご覧いただけます

インタビュー　現場からみた中学校教育の移り変わり

中学校教育の不易は「思い出づくり、夢づくり、人づくり」

全日本中学校長会会長／東京都港区立御成門中学校校長　壷内 明

時代の変化と共に、中学校における指導の内容や方法は大きく変わってきた。しかし、さまざまな変化に柔軟に対応しながらも、教育現場には変わらず守り続けてきたものもある。中学校教育の歴史を振り返りながら、これまでと変わらず教師に求められることは何かを、全日本中学校長会の壷内明会長にうかがった。

Tsubouchi Akira

つぼうち・あきら◎新潟大卒業、兵庫教育大大学院修了。東京都江戸川区立篠崎中学校教諭、東京都足立区教育委員会指導主事、葛飾区立金町中学校校長などを経て、2006年度から現職（会長職は2008年度～）。全日本中学校長会総務部長、東京都中学校長会長なども歴任。

ゼロからつくり上げてきた中学校教育

日本が世界をリードする国にまで発展できたのは、小学校、中学校の義務教育が大きく貢献していると、私は思います。特に、中学校は義務教育の仕上げの段階として、戦後間もなくから高度経済成長期にかけては即戦力となる人材を社会に送り出し、高校・大学進学率の上昇と共に、前期中等教育として高校・大学へと進む子どもを育てる役割も果たしてきました。

中学校教育は、戦後の学制改革の一環で、1947（昭和22）年にそれまでなかった新しい教育段階としてスタートしました。小学校や高校とは違い、引き継ぐ校舎も組織もありません。自治体・学校・保護者が一体となって、校地の獲得や校舎の建設、設備の整備のために東奔西走し、新しい中学校づくりに励んだと聞いています。

13～15歳の子どもに適した授業内容や指導方法を確立させていく努力は、並たいていのものではなかったでしょう。学習指導要領はありましたが、中学生に対する指導の蓄積はほとんどなかったからです。

皆が一丸となってゼロから立ち上げた中学校教育は、日本の社会情勢や子どもの気質の変化に応じて、その指導内容や指導方法が大きく変わっていきました。

最初の大きな変化は、高校への進学率が90％を超えた1974（昭和49）年前後ではないでしょうか。経済成長を遂げていく社会の変化に対

●「中学校教師として大切にしていること」「教師をしていてよかったと感じること」を先生方にうかがいました。その声の一部を次のページから紹介します。

中学校教師が語る 私が一番大切にしていること

「生徒をあたたかく見守る」ということを大切にしています。生徒は、ときには教師に反抗したり、こちらの信頼を裏切ったりするような事もありますが、そんなときでも「私はいつもきみを見守っているよ。信頼しているよ」という姿勢を持ち続けることが重要だと思います。（和歌山県／那智中学校／和田充旦）

応するように教育の重要性が高まり、かつてなら中学校卒業後は働いていた子どもも、勉強に力を入れて高校に進学するようになりました。

教師も、子どもの意欲や社会の要望に応えるように、土日も関係なく子どもたちと過ごし、指導に励んでいたことと思います。教師は365日、学校で過ごしていたといっても過言でないほど忙しい日々でした。しかし、生徒と一緒に多くの時間を過ごしたからこそ、叱咤激励しながらの信頼関係が築かれていったのだと思います。

このころ、一方では授業に遅れがちな子どもが続出しました。当時の授業時数・学習内容はそれまでで最も多く、当時**「教育内容の現代化」**といわれたほど中身が濃いものだったからです。各教科で新しい内容が盛り込まれ、「小学生3割、中学生5割、高校生7割」の子どもが授業についていけない状態だといわれるようになりました。教師の負担は増すばかりでしたが、生徒が「落ちこぼれ」にならないようにと、放課後の補習などを現在と変わらずよく行っていました。

「生きる力」の育成に向け子ども中心の授業に転換

授業の内容が濃くなるにつれ、生徒の様子に変化が見られるようになりました。1974（昭和49）年前後から校内暴力や授業の抜け出し、教師への暴力など、荒れる生徒が目立ち始めたのです。教師は授業よりも生徒指導に追われていたというのが現実で、生徒を警察に迎えにいった経験をされた先生は相当いたと思います。ただ、今と比較すると、生徒と真剣に向き合う時間を確保できていたのではないでしょうか。皆、子どもが本当に好きだから、叱るべきときはきちんと叱り、褒めるときは徹底的に褒める。私自身、教育は褒めて、叱って、認めて、励ましての繰り返しだと思っていましたし、その気持ちは今も変わりません。

こうした**生徒指導上の課題は、学習指導要領にも影響を与えました。**学校教育は知識の伝達に偏る傾向にあるとして、1981（昭和56）年に施行された学習指導要領では、教科の基礎・基本を確実に身に付けさせるために**教育内容を精選し、授業時数が削減**されたのです。

更に、1989（平成元）年に告示された学習指導要領を境に、教師による教え込み型の授業から、子どもを中心にした授業へと変わっていきました。テストの点数などの「見える学力」を主体とした指導や評価ではなく、**「個に応じた指導」を通じて、生徒が自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力を養う指導や評価を重視**するようになりました。こうした新しい学力観は、教師の指導スタイルや評価の仕方を大きく変えました。

この流れは2002（平成14）年に施行された現行の学習指導要領にも引き継がれ、**「生きる力」**と**「ゆとり」**をキーワードとして、授業時数と教育内容が大幅に削減されました。

現在も「生きる力」の育成重視の姿勢に変わりはありません。社会が変わり、知識基盤社会、低経済成長期にあって、「生きる力」はますます重要になってきます。そのためには、PISA（注）などの国際的な学力調査や文部科学省の「全国学力・

注：経済協力開発機構（OECD）が実施する、15歳児（日本では高校1年生）を対象とした国際的な学習到達度調査。2000年に第1回の本調査を行い、以後3年ごとに実施。第1回は読解力、第2回は数学的リテラシー、第3回は科学的リテラシーを重点的に調べている

学習状況調査」などを通して浮かび上がってきた課題を解決していくことはもちろん重要です。そして**何よりも、感動する心や思いやりの心、感謝する心を持ち、将来に希望を持ち、コミュニケーション能力や社会性を持つ子どもを育てていくことが大切ではないでしょうか。**

これまで、学校現場を代表して、学習指導要領の改訂についての意見表明や情報発信をしてきた私たち全日本中学校長会にとって、目下の課題は新学習指導要領の円滑な実施のための体制づくりです。例えば、教師が子どもと向き合う時間を確保するため、教員定数増などを働きかけています。

新任時代に痛感した生徒、保護者との信頼関係

中学校教育の試行錯誤は今も続いています。社会が変化し、その影響を受けて子どもたちが変われば、教える内容や手段をそれに合わせていくことは当然でしょう。しかし、**「人格の完成」と「国家および社会の形成者の育成」という教育の目的は不変であり、教育の土台となるのは子どもとの信頼関係です。**私自身、それを痛感しています。

1974（昭和49）年、「教育内容の現代化」のころに教師になった私は、赴任2年目に担任を任されました。その学校は、授業の抜け出しや対教師暴力などへの指導に大変苦しんでいました。荒れていた生徒はグループで行動していましたが、私が担任をしていた学級にそのリーダー格の生徒がいたのです。グループを抜けさせようと懸命に働きかけましたが、その生徒の行動は改善されませんでした。

そこで、私は保護者に協力を求めました。生徒の家庭は共働きだったため、私は夜10時過ぎに訪問し、保護者の帰りを待ちました。「（荒れているのは）うちの子だけではない。放っておけばよい」と言う父親に対して、「私は彼を更生させたい。力を貸してください」と理解を求めたのです。そうした家庭訪問を1週間に1回、半年ほど粘り強く続けました。その結果、父親が「わかった、何とかする」と、一緒に生徒に向き合ってくれたのです。

私は、生徒の心をがっちりつかんで離さない教師になりたいと思っていました。しかし、生徒と教師が互いに信頼し合えるようになるためには、生徒に対してだけでなく、まわりの人たちにも働きかける必要があると学びました。

その生徒は中学時代には荒れた状態が続いたのですが、その後、立派な社会人になりました。そして、私はその生徒の結婚式に呼ばれました。クラス会は今も開いています。**卒業後の生徒の成長までも見届けられることほど、教師冥利（みょう）に尽きるものはありません。教師として何が必要なのか。生徒たちと真剣に向き合う中から学んでいくというのは、今の先生方も変わらないと思います。**

子どもたちが夢や希望を持てるような授業を

私の教師生活は30年以上になりました。苦しく、辛い時期もありましたが、教師を辞めようとは思いませんでした。教師ほど魅力あふれる職業、人に大きな影響を与える職業は、ほかにはないと思うからです。私自身、中学時代に教わった先生に大きな影響を受けました。教師になりたいという夢を持ったのも、教わった先生の影響です。自分にはこれしかない、そう思って教師を続けてきました。

「思い出づくり、夢づくり、そして人づくり」

これが今も昔も変わらない中学校教師の役割だと思います。中学校での3年間にはいろいろな思い出ができるでしょう。学校行事、部活動、そして授業で、さまざまな人とかかわり、それまでにしたことのない経験を積み重ねていきます。子どもは感動したり、喜び合ったり、困難を乗り越えたりしながら学んでいくのです。そうした一つひとつの思い出が鎖のようにつながり、夢が育まれるのではないでしょうか。

今の子どもは夢がない、とよくいわれます。私はそれが残念で仕方ありません。先生方には、子どもが夢や希望を持てるような、持ち続けられるような授業を心がけてほしいと願っています。それが、社会で活躍する自立した人づくりにつながるからです。

中学校教師が語る 私が一番大切にしていること

生徒を引き付けるような授業の仕方や、専門知識を高める努力を大切にしています。私の専門は英語なので、ラジオ講座を聴いて英語のブラッシュアップに努めたり、授業のアイデアが書いてある文献を読んだりしています。また毎年、年度の終わりには、生徒たちに私の授業を受けた感想を書いてもらっています。（北海道／恵北中学校／W・Y）

中学校教師が語る 私が一番大切にしていること

生徒が自分の考えで行動し、それに対する責任を持てるようになることを重視しています。社会では、指示されたことしかできない人間ではなく、たとえ失敗してもそのことをしっかり受けとめ、新しいことに挑戦できる人間が求められています。「トラブルを自分たちで解決する」ことを日々生徒に指導しています。（福島県／N中学校／S・T）

調査分析 ベネッセ調査で振り返る

データでひも解く中学校教育の30年

ベネッセ教育研究開発センター　教育調査室長　木村治生（はるお）

小社では30年以上に渡り、多くの研究者や学校の先生に支えられながら、400以上の調査を行ってきた。その中での「中学校」をテーマとした調査結果を基に、中学校教育がどのように変化してきたのかを見ていく。

ベネッセコーポレーションでは前身の福武書店時代の1978（昭和53）年に調査報告書『モノグラフ・中学生の世界』を刊行し、以来、その時々の教育や子どもの様子について浮き彫りにしてきた。ベネッセ教育研究開発センターの設立以降も、調査対象やテーマを広げて調査を行っている。

今回はそれらの調査報告から、中学校や中学生は、この30年でどのように変わってきたのかを、中学生の学習にかかわるデータと教師の意識・行動のデータを基に振り返る。

30年前のデータがないものについては、参考にできる最も古いデータで代替した。調査の大半は公立中学校を対象としているが、学年や地域などが異なる条件下に実施されている場合もある。単純に数値を比較できない部分もあるが、今回は細かな差異にはとらわれず、大きな傾向の変化を捉えてみたい。

TOPIC 1 中学生の学習

学習時間はここ30年で減少

家庭での学習時間「0分」が増加

まず、中学生の学習の様子を見る。以前の中学生は、どのように学習していたのだろうか。

図1に家庭での学習時間の推移を示した。図の注に示したとおり、質問紙のスケール（尺度）が違うため単純な比較はできないが、1980年代前半の中学生は、今の中学生よりも長い時間勉強していたようだ。1983年調査と2004年調査（いずれも2年生の数値）を比較すると、次のようなことがいえる。

第一に、「0分」という回答が大きく異なる。1983年調査では、家庭で学習しない生徒は1割に満たなかったが、2004年調査では4人に1人を超える。第二に、「2時間」を超える割合は、1983年調

Benesse教育研究開発センターウェブサイトでは、教育関連のさまざまな調査データを掲載しています。是非ご覧ください。

http://benesse.jp/berd/

査では3割であったが、2004年調査では1割強に減少した。

これらの点から、以前と比べて、学習時間がずいぶん少なくなったことがわかる。1983年当時は、一定程度の学習を家庭でしていることを前提として、学校で指導することができた。しかし、現在では「30分」以下が半数を超えており、家庭学習が十分ではないことを前提に指導をしなければならない状況といえそうだ。

通塾率は大きな変化なし

続けて、通塾の状況を確認しよう。同じ調査で中学2年生の通塾の状況を見たのが、**図2**である。ここからは、通塾率や通塾している場合の日数が大きく変わっていないことがわかる。通塾率は地域によって異なるが、『モノグラフ・中学生の世界』Vol.1では、文部省（当時）のデータを引用して、1977年時点で全国的に4割の中学生が塾に通っていることを伝えている。全体として1980年前後の中学生は、相当量の学習をしていたようだ。

こうした過剰ともいえる学習の背景として、当時、受験競争が激化していたことが挙げられる。1980年代の中学生は、第二次ベビーブームに生まれ、当該人口が増えていった世代である。それまで急速に伸びていた大学・短大の進学率が4割の手前で頭打ちになり、浪人生が増える状況にあった。このために中学生や高校生の多くが受験を意識した勉強をしていたが、一方で、子どもたちの勉強のしすぎや詰め込み教育が社会問題になっていく。

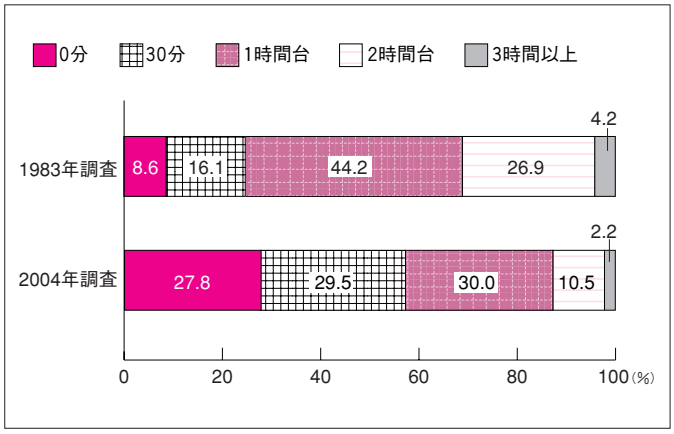
「ゆとり教育」の下で進んだ学習離れ

では、学校外の学習時間はどう推移しているのか。**P.6図3**は、2年生を対象に5年おきに実施している調査（『学習基本調査』）を基に、家庭学習と学習塾の学習を含めた学校外の学習時間の変化を示している。

ここからは、1990年代に学習離れが進んだことが読み取れる。「0分」と「30分」の合計の比率は、1990年18・8%→1996年22・5%→2001年30・7%と推移した。この変化に連動して、「2時間台」「3時間以上」といった長時間の学習をする生徒が減少したことがわかる。

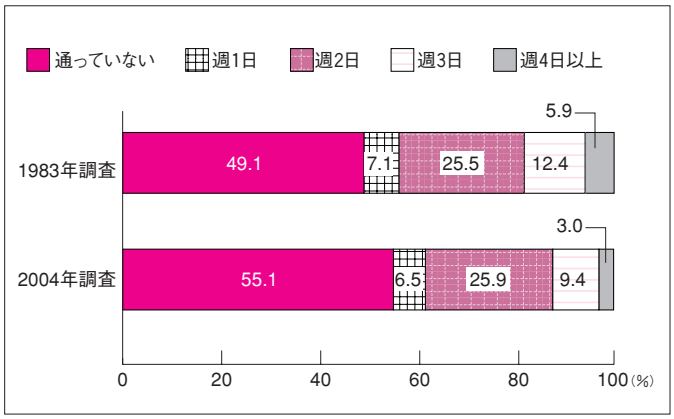
1990年代は、子どもの「ゆとり」を実現することが大きな政策目標であった。例えば、1996年の中央教育審議会答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」

図1　減少する家庭学習時間



注1：1983年調査は、『モノグラフ・中学生の世界』Vol.15（学業成績～生徒たちは成績の良し悪しをどうとらえているか）から中学2年生の数値を抜粋した。また、2004年調査は、『第1回子ども生活実態基本調査』から中学2年生の数値を抜粋した。いずれも「無回答・不明」を除外して数値を算出した。
注2：1983年調査は、「0分」「30分」「1時間」「1時間半」「2時間」「2時間半」「3時間」「4時間」「5時間以上」のスケールで尋ねている。図では、「1時間」と「1時間半」の合計を「1時間台」、「2時間」と「2時間半」の合計を「2時間台」、「3時間」「4時間」「5時間以上」を「3時間以上」として示した。
注3：2004年調査では「ほとんどしない」「15分」「30分」「45分」「1時間」「1時間30分」「2時間」「2時間30分」「3時間」「3時間以上」のスケールでたずねている。図では、「ほとんどしない」を「0分」、「15分」「30分」「45分」の合計を「30分」、「1時間」と「1時間30分」の合計を「1時間台」、「2時間」と「2時間30分」の合計を「2時間台」、「3時間」と「3時間以上」の合計を「3時間以上」として示した。

図2　通塾率には大きな変化はない



注1：1983年調査は、『モノグラフ・中学生の世界』Vol.15（学業成績～生徒たちは成績の良し悪しをどうとらえているか）から中学2年生の数値を抜粋した。また、2004年調査は、『第1回子ども生活実態基本調査』から中学2年生の数値を抜粋した。いずれも「無回答・不明」を除外して数値を算出した。
注2：2004年調査では、通塾日数が通塾の有無についての設問のサブクエスチョンである。

中学校教師が語る　私が一番大切にしていること

大切にしているのは、「生徒の人格を認めながら、自立を促すこと」です。ともすれば教師と生徒という関係は上下関係にもなり、上からの目線で生徒を見てしまいます。生徒の考えを考慮し、教師の思いを押し付けすぎないよう、この言葉をいつも心に留めています。（奈良県／K中学校／M・Y）

中学校教師が語る 私が一番大切にしていること

常に「生徒のために」というボランティアの気持ちも持ち合わせていたいと思います。給与が減らされるなど、教育条件の改悪が進む中、視点を自らの生活に合わせるのではなく、教師という仕事は聖職だというプライドを持ち、使命感を持って職務にあたりたいと思います。（宮城県／大川中学校／千葉和彦）

では、過度の受験競争や知識を詰め込む学習が「生きる力」の成長を阻んでおり、子どもに「ゆとり」が必要だと主張されている。

こうした論調は、1990年代の教育改革を支える理論として機能してきた。1990年以後の主な教育政策を概観すると、「新しい学力観」を提唱した学習指導要領の施行（1993年）、「生活科」の実施、学校週五日制の部分実施（1992年、完全実施は2002年）、教育内容の精選や「総合的な学習の時間」の創設を行った学習指導要領の改訂（1998年）などが挙げられる。

これらには、知識偏重の是正という思いが込められていたが、同時に勉強のプレッシャーを取り除くことにもつながった。この間、バブル景気崩壊後の長期不況によって、学歴を得て一流といわれる企業に就職することが必ずしも幸せにつながらない、という考えが社会に広がった。

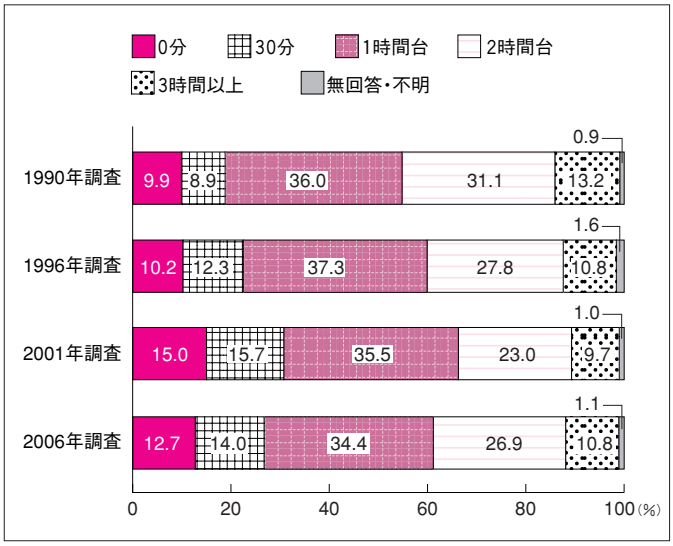
こうした環境の変化は、中学生の意識にも色濃く表れている。**図4**には学習の悩みを示した。1990年から2001年にかけて、「どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う」「世の中に出てから、もっと役に立ちそうな勉強がしたい」といった、学習の目的がわからない悩みが増えた。これに対して、「先生は成績にこだわりすぎる」は減少している。学習目的が見えにくくなったこと、周囲からの圧力が弱くなったことによって、1990年代は学習離れが進んだのではないか。

2000年代に入り「学習回帰」の傾向

2000年代に入り、「学習回帰」とも呼べる現象が見られる。**図3**を見ると、2001年から2006年にかけて「0分」「30分」という回答が減り、「2時間台」以上の回答が増えた。**図4**からは、学習目的が見えないという悩みが減少していることがわかる。

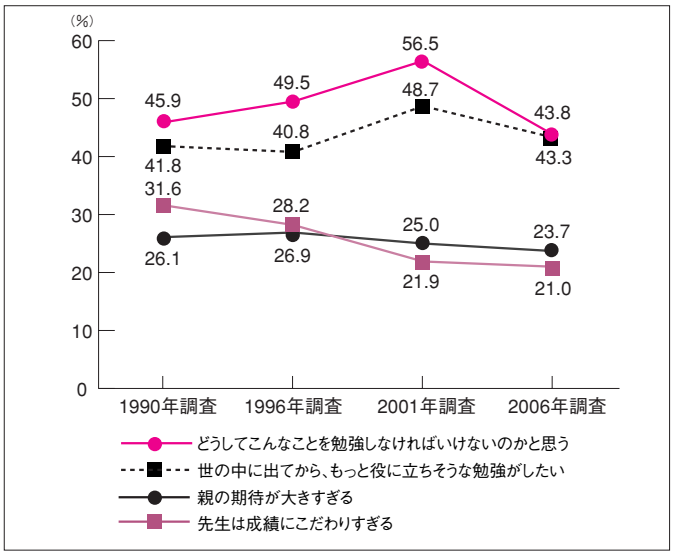
このような変化の要因はいくつか考えられるが、その一つには、教師のさまざまな努力や工夫があるだろう。2000年代に入り、文部科学省は、学力低下を危惧する声に対応して、学校に学力を高めるための取り組みを強く促した。その結果、基礎・基本の徹底的な指導、キャリア教育や進路学習の充実、「朝の読書」のような授業以外の指導、放課後や土曜日の補習、家庭学習の支援など、多くの取り組みが学校で行われるようになっている。これらの成果が生徒の学習行動に表れた可能性を、見落としてはならない。

図3 学校外学習時間（塾での学習を含む）も減少



注1：『学習基本調査』（第1回～4回）、対象は中学2年生。
注2：図では、「ほとんどしない」を「0分」、「およそ30分」を「30分」、「1時間」と「1時間30分」の合計を「1時間台」、「2時間」と「2時間30分」の合計を「2時間台」、「3時間」「3時間30分」「それ以上」の合計を「3時間以上」として示した。

図4 「ゆとり教育」の下で増えた「学習上の悩み」



注1：『学習基本調査』（第1回～4回）、対象は中学2年生。
注2：複数回答。

TOPIC 2 高校進学

高校入試へのプレッシャーは昔と変わらない

強い高校入試へのプレッシャー

次に、高校進学に対する意識や行動を検討しよう。

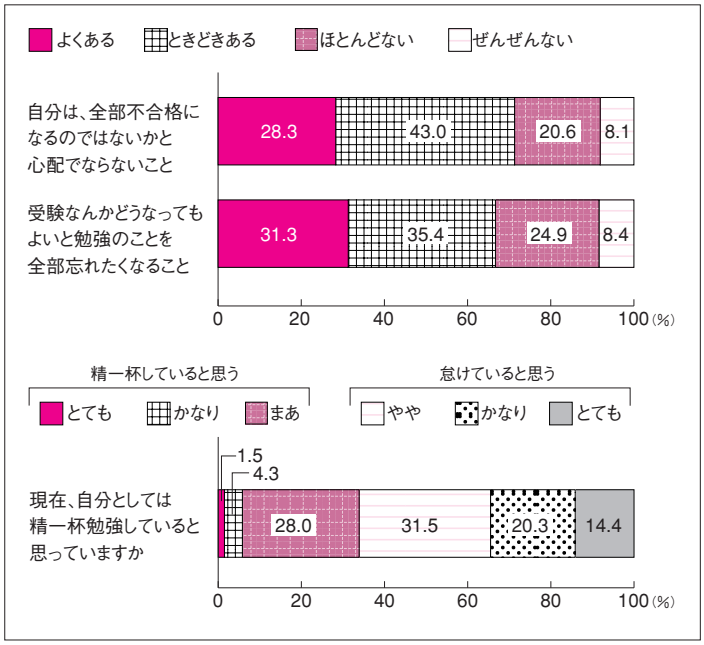
高校進学率は、1974年に90%を超えた。その後もわずかに増加を続け、2008年は96・4%である。9割を超える中学生が高校に進学する状況は、30年ほど前から変わらない。

それでは、その頃の中学生は高校進学や入試についてどのような思いを抱いていたのだろうか。

図5は、1981年に中学3年生を対象に行った調査から、高校入試に対する意識を抜粋したものである。この結果から、不安やプレッシャーを感じている中学生の意識がうかがえる。「自分は、全部不合格になるのではないかと心配でならないこと」が「ある（よく＋ときどき）」の比率は71・3%、「受験なんかどうなってもよいと勉強のことを全部忘れたくなること」が66・7%である。

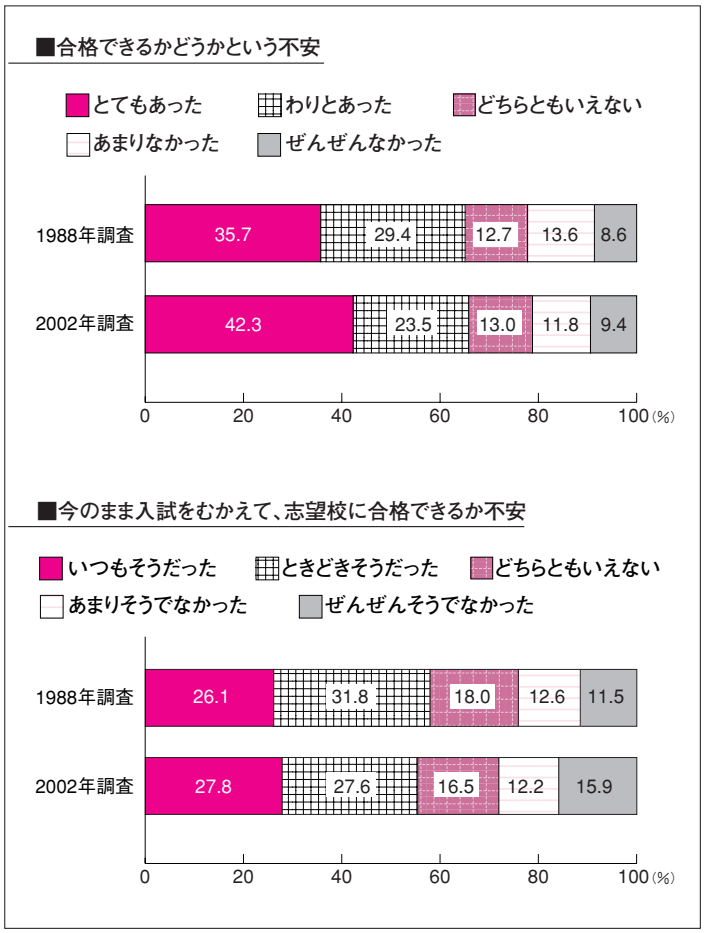
この調査では、中学3年生の11月段階での学習時間（平日）を尋ねているが、「1時間未満」7・5%、「1時間台」18・1%、「2時間台」32・5%、「3時間以上」41・9%と、かなり長い。それでも、「現在、自分としては精一杯勉強していると思っ

図5　1980年代は高校入試に高いプレッシャー



注1：1981年調査。『モノグラフ・中学生の世界』 Vol. 11（高校進学～揺れ動く生徒の心）、対象は中学3年生、実施は11月。

図6　今でも高い高校入試への不安や悩み



注1：1988年調査は『モノグラフ・中学生の世界』 Vol. 30高校進学～『15の春』の実態を探る）、2002年調査は『モノグラフ・中学生の世界』 Vol. 72（高校進学の現在～1988年との対比）、対象はいずれも中学3年生、実施は3月。

中学校教師が語る　私が一番大切にしていること

中学校時代は、子どもから大人へと変化する大切なときであり、高校進学など進路選択という人生の最初の岐路でもあります。教師として、「夢の実現」の手伝いができるように、縁の下の力持ちとして、生徒を支えていきたいと思っています。そして、生徒が最高の思い出を味わえるように取り組んでいます。（鹿児島県／K中学校／S・A）

「情熱」。これがなくなったら退職します。（北海道／H中学校／N・M）

ていますか」という問いに、66・2％が「怠けていると思う（やや＋かなり＋とても）」と回答している。

TOPIC1で述べたように、1980年前後は多くの子どもが長時間の勉強をしていたが、その背景に「受験が厳しい」という思いのほか、「努力は大切だ」「勉強することは大切だ」といった意識が現在よりも強くあった、と推察できる。

本人にとって高校受験は大変

このような入試に対する不安やプレッシャーの意識は、どう変わっていくのだろうか。

1981年調査と単純に比較できるデータはないが、『モノグラフ・中学生の世界』では1988年と2002年の2度にわたって「高校進学」をテーマとした調査を行っている。ここから、中学生の意識の変化を探っていこう。

P.7図6は、高校入試への不安について示したものだ。1988年調査・2002年調査共に、3人に2人は「合格できるかどうかという不安」が「あった（とても＋わりと）」と回答している。また、6割近い生徒が、「今のまま入試をむかえて、志望校に合格できるか不安」という意識を持っており、2時点で大きな変化はない。

図表は省略するが、「勉強が手につかない」（1988年57・8％→2002年57・2％）「なんだかイライラする」（同51・3％→50・7％）など、入試前の心理状況についてもほとんど変化が見られない（数値は「いつもそうだった」と「ときどきそうだった」の合計）。

偏差値による輪切りで受験校を決めることが競争の激化を招いているという批判から、1993年に文部省（当時）は業者テスト利用の自粛を指導し、その後、学校で業者テストが行われることはなくなった。更に、2002年調査では65・5％が推薦入試を「受けた」と回答するなど、推薦入試の枠が拡大している。

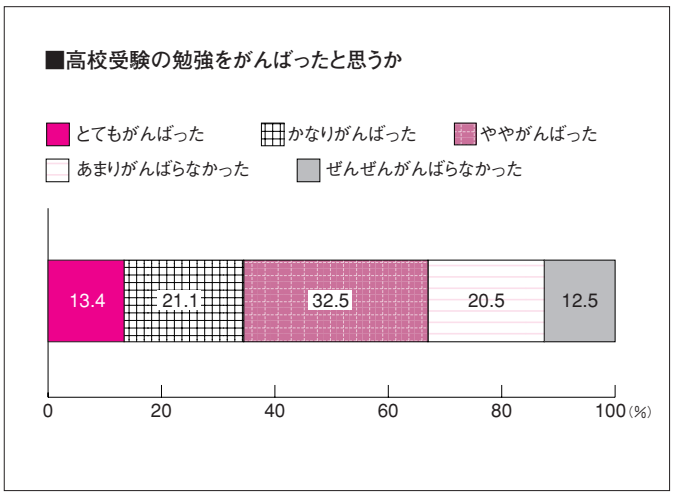
客観的に見れば、偏差値の数ポイントを競う受験の厳しさは、緩和されているように思える。しかし、生徒本人にとっては、入試が大変だという認識は変わらないようだ。

今の生徒は自分に甘くなっている？

ここで、一つの疑問が浮かんでくる。本人の認知としての高校入試の大変さは変わっていないのに、学習時間が減っているのはなぜだろうか。一つ考えられるのは、「勉強のがんばり」に対する自己評価が変化したことである。

図7は、高校受験の勉強をがんばったと思うかを尋ねた2002年の調査結果だ。これを見ると、「とてもがんばった」と「かなりがんばった」の合計で34・5％、「ややがんばった」までを含めると67・0％が、自分の努力を評価している。尺度が違うので比較はできないが、**P.7図5**とはずいぶん異なる印象だ。1981年当時は一定の勉強をしていても「まだ足りない」と考える生徒が多かったのに対して、近年は「十分にがんばった」と評価する生徒が多くなっているのではないだろうか。

図7　高校受験のがんばりには満足？



注1：2002年調査。『モノグラフ・中学生の世界』Vol. 72（高校進学の現在〜1988年との対比）、対象は中学3年生、実施は3月。

TOPIC 3 教師の意識と行動

勤務時間が増加し、業務の負担感が増す

平日の労働時間は2時間も増加

中学校教師の意識と行動に焦点を当てる。最初に、教師の生活時間の変化を見ていこう。図8は、いくつかの調査から生活時間の平均値を抜粋したものである。ここからは、教師の勤務が過酷になっていく様子が見て取れる。およそ30年の間に、次のような変化があった。

第一に、退勤時刻が遅くなった。出勤時刻は大きく変わっていないため、学校にいる時間が長くなっている。1980年調査では在校時間は10時間程度であったが、2007年調査では12時間弱である。

第二に、睡眠時間が減少した。1980年調査と2007年調査を比べると1時間以上も短くなり、2007年調査の平均値は6時間を下回っている。

第三に、テレビ視聴時間や読書時間も減少した。全体に、生活にゆとりがなくなっている印象を受ける。

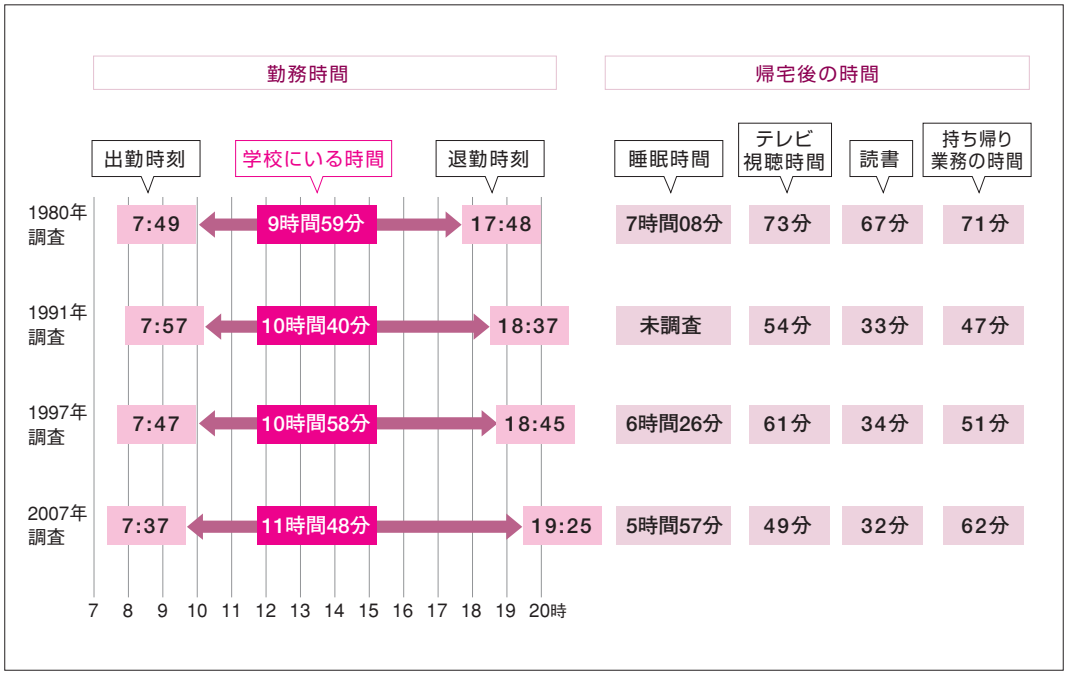
第四に、教材研究や採点などを含めた持ち帰り業務を行う時間は、1990年代に減少傾向を示していたが、2007年調査では再び増加した。ここ数年、家で業務をする時間も増えている可能性がある。

こうした傾向をまとめると、以前に比べて中学校教師の業務量は増えていることが容易に推測できる。

時間不足が最大の悩み

勤務の大変さは、意識の変化にも表れている。P.10図9は、中学校教師の悩みを示したものだ。「授業の準備が十分にできていない」「年間の授業時数が足りない」といった時間の不足に起因する悩みが、1993年調査から2000年調査にかけていったん減った後、2007年調査にかけて大きく増加している。おそらく、生徒指導や保護者・地域対応といった学習指導以外の業務が増えたことにより、1990年代は在校時間が増えたと思われる。しかし、全体に生徒の学習量を減らす方向性

図8 教師の労働時間は大幅増



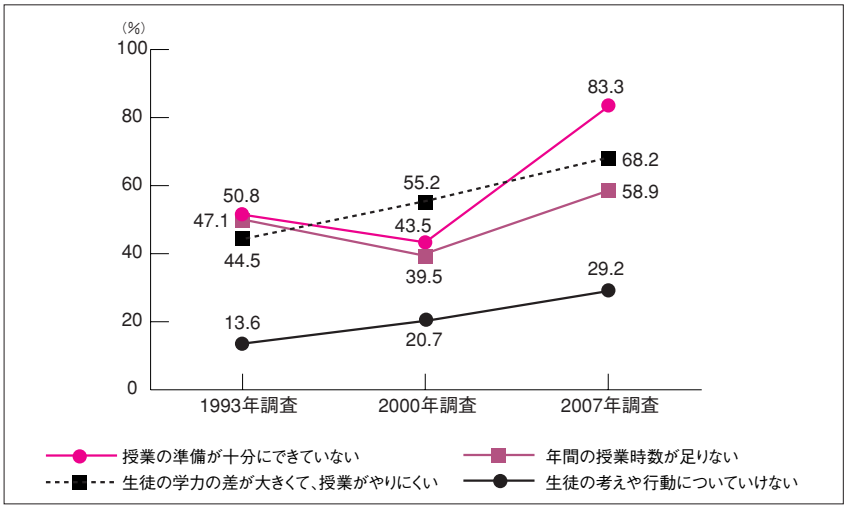
注1：1980年調査は『モノグラフ・中学生の世界』 Vol.7（中学教師の生活と意見）、1991年調査は『モノグラフ・中学生の世界』 Vol. 40（教師たちの生活と意見）、1997年調査は『第1回学習指導基本調査』、2007年調査は『第4回学習指導基本調査』。調査はいずれも郵送法で行われたが、対象地域は異なる。
注2：1980年調査は、記入してもらった時刻・時間から平均値を算出した。それ以外の調査は、選択肢の時刻・時間を数値に換算し、平均値を算出した推計値である。たとえば、選択肢の「しない」は「0分」、「1時間」は「60分」などのように置き換えて算出した。

中学校教師が語る 私が一番大切にしていること

私が大切にしているのは、子どもの個性や能力を開花させ、その個性や能力を伸ばすことです。そのために、生徒たちに「自分の力を信じて努力する」ことの大切さを、日々伝えています。「人はだれもが輝きを秘めた原石」であり、自分の可能性を信じ、努力することが、未来をひらくことになるからです。（北海道／帯広第七中学校／I・K）

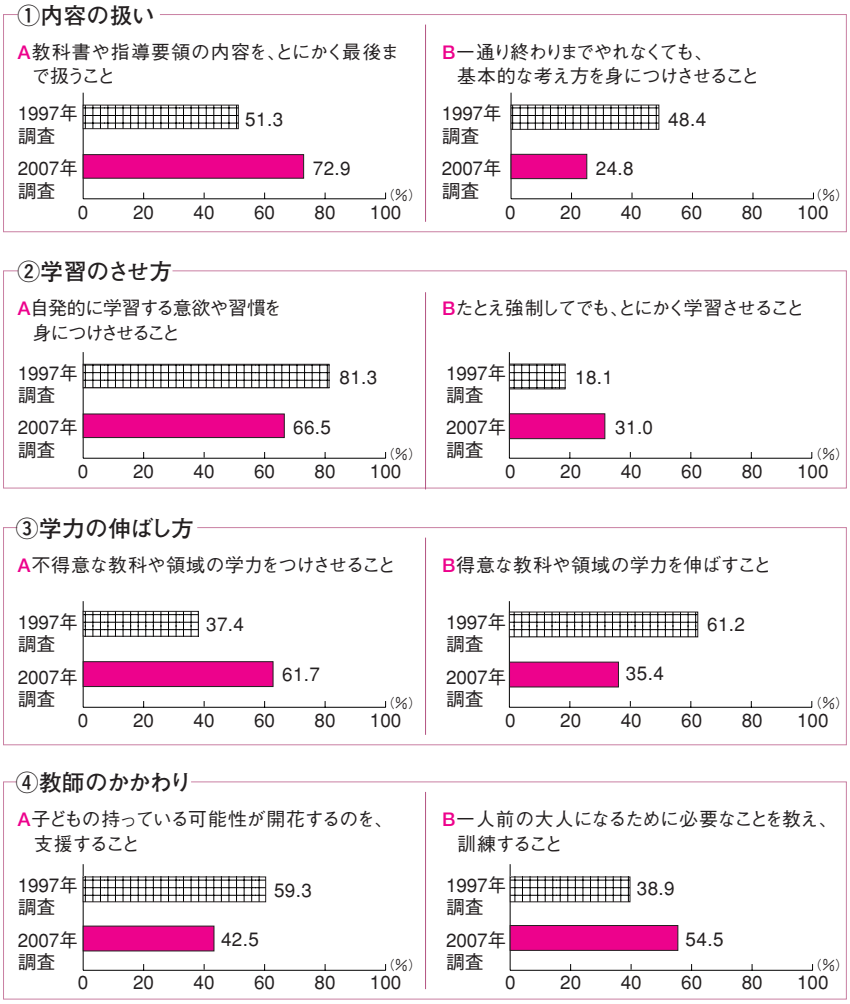
高校進学後も「学び続ける意志」を持ち続けられる生徒の育成を心がけています。そのための「学力」「体力」「気力」を、いかに中学校で付けさせるかが大切だと考えます。日本は、リーダー層を支える人材が豊かにならなければ、国際社会にますます差をつけられると危機感を持っているからです。（福島県／N中学校／W・Y）

図9 悩みを持つ教師の増加



注1：1993年調査は『モノグラフ・中学生の世界』 Vol. 47（教師の指導力）、2000年調査は『モノグラフ・中学生の世界』 Vol. 68（中学教師は訴える～中学教師の全国調査から）、2007年調査は『第4回学習指導基本調査』。
注2：1993年調査と2000年調査は「とても感じている」と「かなり感じている」の合計、2007年調査は「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計の比率を示している。
注3：2007年調査は、質問文の一部が異なる。「授業の準備が十分にできていない」は「教材準備の時間が十分に取れない」、「生徒の考えや行動についていけない」は「子どもたちが何を考えているのかわからない」という問いに、そう思うかをたずねた。

図10 教育観はここ10年で大きく変化



注1：1997年調査は『第1回学習指導基本調査』、2007年調査は『第4回学習指導基本調査』。
注2：「無答・不明」は図から省略したため、AとBの合計は100%にならない。

が明らかだったので、指導や準備の時間不足という悩みは減っていったのだろう。このことは、教材研究を含む持ち帰り業務の時間が減っていたこととも符合する。

ところが、2002年に完全学校週五日制が導入され、ただでさえ平日の時間のゆとりがなくなり、学力向上のための学習指導の充実が強く求められるようになった。学校に対して十分な資源（教員数や予算など）が与えられないままに、多くのことが求められるようになった。その結果が教師の長時間勤務や持ち帰り仕事の増加につながり、時間不足の悩みをもたらしたのではないだろうか。

学習に対する教師の関与は増大

ここ数年で、中学校教師の教育観も変化している。図10はAとBで対にした教育観のうち、あえていえば重視していると思う方を選んでもらった結果である。

①「内容の扱い」に関しては、1997年調査では「教科書や指導要領の内容を、とにかく最後まで扱うこと」と「一通り終わりまでやれなくても、基本的な考え方を身につけさせること」が拮抗していたが、2007年調査では前者が20ポイント以上増えた。

②「学習のさせ方」に関しては、いずれの時点でも「自発的に学習する意欲や習慣を身につけさせること」が多いが、2007年調査では「たとえ強制してでも、とにかく学習させること」が増加している。

③「学力の伸ばし方」は、1997年調査では「得意な教科や領域の学力を伸ばすこと」が6割と多数派を占めていたが、2007年調査では「不得意な教科や領域の学力をつけさせること」が6割になった。

④「教師のかかわり」では、「子どもの持っている可能性が開花するのを、支援すること」に対する支持が減り、2007年調査では「一人前の大人になるために必要なことを教え、訓練すること」の方が多くなった。

全体的に、すべての教科・領域について、一定以上の学力を身に付けさせることを重視する傾向が強まっている。それは、生徒自身の自発的な意欲に任せるだけでなく、教師が強く働きかける必要性を感じるようになっている。こうした意識の変化は、「確かな学力」の育成が求められるようになったことが原因の一つになっていると考えられる。

まとめ　変わるもの・変わらないもの

学校が「楽しい場所」であり続けるために

30年に渡る中学校の変化について、いくつかのデータを基に検討してきた。生徒も、教師も、その意識や行動は時代ごとの社会環境や教育政策の影響を受けて、さまざまに変わってきたことがわかる。その時々で学校や教師に何が求められるかに対応して、指導のあり方は異なるのだろう。

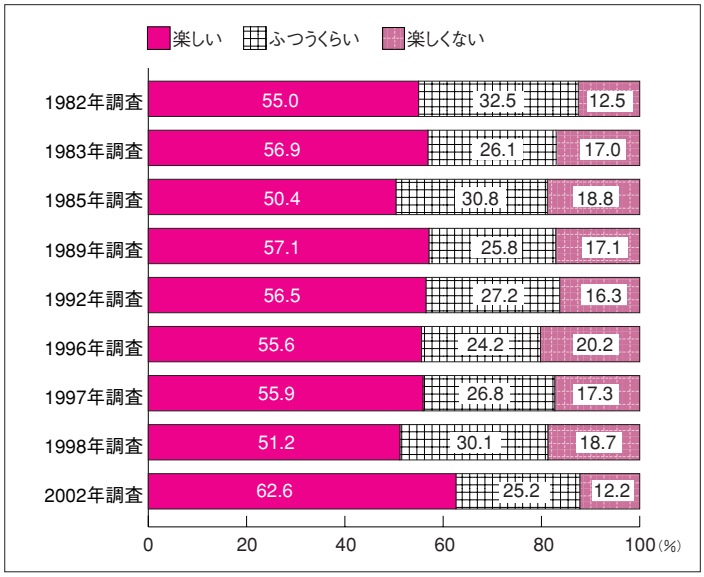
しかし、変わらないもの・変えてはいけないものもあると思う。教師は、生徒が学校での学びに意味を見出し、学校に楽しく通えるようにする努力を怠ってはならない。幸いなことに、そうした学校の価値は、この30年で大きく変わっていないかもしれない。

図11は、生徒に学校が楽しいかどうかを尋ねた結果だ。これを見ると、多少の違いはあるものの、すべての調査年で5割を超える生徒が「楽しい」と回答し、「楽しくない」という回答は2割かそれ以下である。

今回は触れられなかったが、この間には学校の「荒れ」が問題になった時代もあった。それにもかかわらず、生徒はおおむね学校を「楽しい場所」と捉えていたようである。そこには、教師のたゆまぬ努力があったと推察する。

もちろん、「楽しい」を増やし、「楽しくない」を減らすよう力を尽くすことは、今後も続けていかなければならない。そうした変えてはいけないものを大切にしながら、いかに変わっていく環境に対応するかが、これからの学校、そして教師に求められるのだろう。

図11　「学校の楽しさ」は30年来変わらない



注1：1982年調査は『モノグラフ・中学生の世界』Vol.12（中学生の自己像～スモール・イズ・ビューティフル）、1983年調査は『モノグラフ・中学生の世界』Vol.15（学業成績～生徒たちは成績の良し悪しをどうとらえているか）、1985年調査は『モノグラフ・中学生の世界』Vol.23（中学生のえがく教師像～生徒たちは教師をどう評価しているか）、1989年調査は『モノグラフ・中学生の世界』Vol.33（学業成績の意味）、1992年調査は『モノグラフ・中学生の世界』Vol.43（疲れている中学生）、1996年調査は『モノグラフ・中学生の世界』Vol.54（「規範感覚」と「いじめ」）、1997年調査は『モノグラフ・中学生の世界』Vol.57（学校内の人間関係）、1998年調査は『モノグラフ・中学生の世界』Vol.60（都市の中学生・山村の中学生～地域差や学校差を考える）、2002年調査は『モノグラフ・中学生の世界』Vol.75（東京の中学生・ソウルの中学生～「のんびり」と「疲れ」の対比）。
注2：いずれの調査も、「楽しい」は「とても楽しい」「かなり楽しい」「やや楽しい」の合計、「楽しくない」は「ぜんぜん楽しくない」「あまり楽しくない」「やや楽しくない」の合計の比率を示している。

中学校教師が語る　私が一番大切にしていること

まず、自分から動くことを大切にしています。教師になると、いつの間にか、「上から目線」で、生徒に接してしまい、態度が横柄になってしまうことがあります。対生徒、保護者、同僚に対してもそうなってしまいがちです。横柄な自分に気づいたときは、とても嫌な気分になるので、そうならないよう気を付けています。（新潟県／K中学校／S・H）

私の目指す教育は「生徒の自立」です。そこで「指導」と「援助」のバランスをどのようにとるべきかを常に考えながら、生徒の成長を見るようにしています。まだ、不安定な、半分大人の生徒たち。いかに生徒たちに現状の課題を認識させ、それを乗り越えようとする意欲を高めるかが、課題だと感じています。（栃木県／O中学校／S・Y）

インタビュー　中学校教育の意義と役割

社会の転換期にある今こそ新たな教育システムの構築を

政策研究大学院大客員教授　永井順國

日本を含め、世界規模で社会システムが変容している今、中学校教育はどのような役割を果たしていくべきなのか。日本の学校制度における中学校教育の歴史的な位置付けや今後の展望を、長らく教育ジャーナリストとして活躍し、中央教育審議会臨時委員等を歴任した政策研究大学院大の永井順國客員教授にうかがった。

ながい・よりくに◎早稲田大教育学部卒業。読売新聞社で教育・司法・企画連載を担当後、論説委員として活躍。女子美術大教授を経て、2007年に現職。文部科学省の有識者会議委員、中央教育審議会臨時委員等を歴任。『学校変革のリーダーを創る』（共編著、明治図書）など著書多数。

中学校教育は「曖昧」その二つの理由

戦後に新制中学としてゼロからスタートした日本の中学校教育は、これまで重要な役割を果たしてきました。現在の社会全体を見渡すと、日本も含め世界全体の近代化が終焉（えん）し、情報化・グローバル化が進み、知識基盤社会へと移ってきています。そのような中、今、改めて中学校教育の位置付けが問われています。

まず、中学校教育の歴史をひも解いてみましょう。

中学校は、小学校と高校とをつなぐ重要な教育段階でありながら、その位置付けが極めて微妙で曖昧なまま今日に至っています。その理由は大きく分けて二つあります。

一つは制度上の課題です。日本の学校教育制度は1872（明治5）年に始まりました。西洋の近代化に追い付き、富国強兵を進めるために、中央統制の下で欧米の手法を全面的に取り入れたものです。初等教育機関として小学校を整備し、義務教育を始めた一方で、欧米に追い付くための高度な教育機関として大学をつくりました。

中等学校、つまり中学校と高等学校は、この小学校と大学をつなぐ教育機関として、小学校と大学ができたあとに整備されました。しかも、中学校に限っていうと、子どもを高校に送り出す「前期中等教育」としての役割を持つと同時に、「後期義務教育」として義務教育の仕上げ段階の役割も担っています。中学校教育は、近代学校制度の始まりから、中途半端な立場が宿命付けられていたといえます。

もう一つは発達段階からみた難しさです。13～15歳の中学生は、心理的・身体的に非常に不安定な思春期にあります。「大きな子ども」であると同時に、「小さな大人」でもあるのです。この両面を子どもの状況に応じて指導する必要性から、中学校教育の内容は複雑で曖昧なものとなりやすい性質を持っているのです。

時代の変化に合わせ問われる新たな教育モデル

このように、制度的に位置付けがはっきりとせず、複雑な役割が求められているのが中学校教育の現状です。この点については、日本だけでなく欧米諸国も20世紀後半から悩んできました。実際、多くの先進国はまるで競争しているかのように教育改革に明け暮れています。アメリカは、1983年の『危機に立つ国家』という報告書を皮切りに、ナショナルスタンダード（注）づくりを含めた教育改革を始めました。イギリスは1988年の教育改革法によって、国家統制的な色合いの濃い教育システムを構築した上で、学校運営そのものは各学校の自由裁量に委ねるというユニークなスタイルを展開しています。

日本は、1970年代ごろにGDP（国内総生産）も1人当たりのGDPも、ヨーロッパの国々に追い付き、追い越しました。その段階で、日本は「モデルなき改革の時代」に入り、自力で教育モデルをつくり上げていかなければならなかったはずです。事実、日本は1971（昭和46）年の「四六答申」などを通して新たなモデルを模索してきましたが、実現できませんでした。その後も手をこまねいていたわけではありません。1990年代半ば以降、中央教育審議会から出された数多くの答申などはその表れの一つといえます。しかし現実には、PISA型の学力観に代表されるように、現在、ヨーロッパ主導の学力定義が世界標準になっているのです。

学校現場はこの改革の波にもまれて疲弊している状況といえます。しかし、**近代化が終わり、新たな時代に移っているといわれている現代において、これまで通用していた学校制度がそのまま通用するとは思えません。その意味で、中学校だけでなく、学校教育全体が歴史的な転換期にあるといえるのです。**

こうした中、中学校の先生方は、教育者として大きなやりがいを感じられると当時に、恐らく教師の中で最も苦労されておられると思います。

低下した意欲や社会性は教師・社会が変えていく

今、最も課題となっているのは、**子どもたちが学校における学びの動機を見いだせないでいることでしょう。**その要因は三つ挙げられます（図1）。

一つめは、高校・大学への進学率の向上です。1947（昭和22）年に現在の「6・3制」が始まり、多くの国民にとっては突然、全員が中学校に進める時代となりました。どのような環境にいる子どもでも、同じように教育が受けられる。その制度は、歓迎され、喜ばれたのです。

図1　子どもが「学びの動機」を見いだせない背景

1　進学率の向上

高校への進学率は約96%、短大・大学への進学率は約53%と5割を超えており、上昇志向だけでは学びに向かいにくい

※値は平成20年度文部科学省『学校基本調査』速報より

2　子どもの家庭内での立場の変化

家族の一員として手伝う・働くという「労働者」の側面がなくなり、何かを与えられる「消費者」として育つため、能動的に学ぶ理由が感じられない

3　学校へ行く意味の変化

テレビやインターネットなどで知識が手に入るので、学校に行って学ぶ意味を見いだしにくい

自分から積極的に生徒にかかわり、意識して声をかけています。また、生徒の良いところを見つけ、それを生徒に伝え、自分の良さを意識化させることが重要だと思います。あとは、基本の徹底。掃除や話を聞く態度、服装などはなぜそうしなければならないのかも伝え、しっかり理解させ実践させることが重要だと考えています。（京都府／R中学校／S・J）

注　学校の制度や、教育の内容などに関する、全国一定の水準

中学校教師が語る 私が一番大切にしていること

まずは、自分の授業を大切にすることが一番だと思っています。授業こそが、生徒とのかかわりにおいて基本になると考えているからです。次に大切にしているのは、担任としての生徒指導。生徒にとって嫌なことであっても、注意する人間も必要だと思い、指導しています。（北海道／K中学校／K・M）

その上、戦前とは違い、「志望すればだれでも入学できる」と標榜した解放的な高等学校制度ができました。この新しいルートができたことによって、多くの人々が「自分の未来は明るい」という希望を抱くようになったのです。

戦前の1941（昭和16）年には20％程度だった中等学校（旧制中学、高等女学校など）への進学率が、戦後どんどん上昇しました。大学進学を思い描けば立身出世のルートが見え、事実、それが保障されていました。大学に進学すれば社会的地位が保障されるというシステムが、子どもにとって学びへの動機付けとなっていたのです。

今に至っては、少子化などの影響で、高校と大学が「地続き」の関係になっています。かつて、大学は一生懸命に努力しなければ入れない場所でした。しかし**今は、さほど受験勉強をしなくても、選り好みしなければどこかの大学に入れます。「学びの動機付け」としての大学入試、上昇志向が、一部の子ども以外には機能しなくなったのです。**

二つめは、高度成長に伴い、子どもが「消費者主権主義」になったことです。かつて、子どもは「家族の中で働く、手伝う」という労働者としての面が大きくありました。ところが今は、子どものころに働くことはほとんどなく、「何かを与えられる」「サービスを受ける」という消費者として育てられています。**自ら欲したり努力したりしなくても生きていけるので、ことさら能動的に勉強しなければならない理由を、見いだしにくくなっています。**

三つめは、子どもにとって、学校に行くことの意味、学ぶことの意味が大きく変わっていることです。学校に行かなくても、テレビやインターネットによって情報が手に入るようになり、**授業を通して知らないことを知ることに驚きや喜びを感じることがとても少なくなりました。**

これら三つの要因のために、子どもにとっては、かつて「行かせてもらう」「行ってもよい」場所だった学校が「行かなければならない」場所となり、「学びの動機付けの装置」が機能しない状態になっています。こうした状況にある子どもへの教育は変わるべきですし、教師の教え方、教科や評価の在り方も変わらざるをえないのです。

更に、都市化や少子化、核家族化などに伴い、人と人との関係を通していろいろなことを学び、成長し、大人になっていく場が減っています。特に異世代間の接点が少なくなり、社会性が育つ枠組みが機能していません。昨今の子どもや若者は社会性に欠けるとよくいわれますが、子どもや若者の責任ではないと私は思います。

このような状況で、**今の子どもは社会性がないといっても始まりません。「社会化（socialization）」の装置が働くような共同体の再構築に、社会全体の責任で意図的・意識的に取り組まなければならないのです。**

世界に広がっている「市民性の教育」を日本にも

「学びの動機付けの装置」と「社会化の装置」に、新たになり得るものは何か。私は**「市民性の教育」**（図2）だと考えています。今、ヨーロッパ各国で取り入れられ、シンガポールなどでも始められている教育体系です。

イギリスでは、2002年から公立中等学校で「市民性の教育」が必修になりました。政治や法律を含めて教科を横断する形で、座学だけでなく、具体的に社会参画していくフィールドワークやボランティア活動、コミュニティサービスを経験しながら市民性を培っています。この過程で、ものの見方や考え方、情報の集め方、選択の仕方、まとめ方、討論の仕方なども学びます。日本の「総合的な学習の時間」と似ていますが、その「主権者教育版」といってよいでしょう。

こうした学習形態は、ほかの教科学習よりも「参加型の学習」が中心となります。体験を通して知らないことを学び、行動を起こし、認識が深まり、自分の幅が広がる――そうした学びの動機につながるサイクルが生まれるのです。

また、「市民性の教育」では、いろいろな世代、さまざまな職業、自分と違う人々と関係を持つことができます。学習を通して、社会性も養われるのです。例えば、東京都には、高齢者福祉施設と保育園、中学校が

一体となった複合施設があります。ここでは、異世代間交流による参加型の学習が自然に実践されています。こうした展開が、学びの動機付けの一つの装置として働く可能性があるのではないでしょうか。

日本の学校では、「市民性の教育」にあたる「環境教育」「消費者教育」「キャリア教育」「法教育」などを、「社会科」「道徳」「特別活動」という既存の教科にそれぞれ当てはめて行っています。しかし、次代の社会の構成員を育てていく教育にするためには、それらを統合して一つの教科にすべきではないかと考えています。

ただし、**学校だけで「市民性の教育」は実現できません。学校のまわりに地域があるのではなく、「地域の中に学校がある」という視点に立った、学校と地域の水平・対等な協力が求められます。**明治以来140年もの間、官主導の中央集権型の社会システムが続いてきたため、地域主体で物事を進めようとしても難しい点があるのは事実です。

小さなトラブルを一つひとつ克服しながら成熟させていくしかありません。とりわけ、教育の中心的役割を果たす学校は重要な位置付けになります。

図2　「市民性の教育」とは何か

市民性の教育の目標

- 子どもを「小さな市民」として扱う
- 子どもの学びの動機付けとなり、社会性を育む

市民性の教育の内容

- 他教科よりも参加型の学習が中心となる
- 現在、日本では既存の教科に当てはめて行われているが、一つの教科体系にすべきもの
- フィールドワークやボランティア活動などに参加する
- いろいろな世代、職業、立場の人とかかわり合いながら進める
- 政治や法律などを含めた教科横断型の学習
- 地域との水平・対等な協力が不可欠

市民性の教育の利点

- ものの見方、考え方、情報の集め方、選択の仕方、討論の仕方などを学べる
- 次の学びへの動機が生まれやすい
- 社会性を培うことができる

世界一流の教師であるという自信を持ってほしい

私は新聞記者時代から数えると、20以上の国々の教育について取材・調査をしてきました。各国の状況と比較しても、日本の教師は社会的な信頼度、教え方、熱心さのすべての面において世界一流だと認識しています。先生方には、大いに自信を持っていただきたいと思います。

しかし社会の傾向として、医師や弁護士、そして教師らプロフェッショナルへの不信が広がっているように思います。任せられるプロがいるからこそ社会が成り立っているのに、不信感が悪循環を招いています。そうした状況の中で、教師への信頼を高めていくためには、学校や教育委員会が日頃から情報を発信して説明責任を果たし、不満や要望に耳を傾ける体制を更に充実すべきです。

中学校教師にとって、仕事の中核は「授業」と「生徒理解」です。ところが、ここ十数年、学校や教師への期待と要求は増え続けています。多忙な業務を改善するには、教員数の改善や支援体制の充実など、行政レベルでの条件整備が欠かせません。

同時に、校務の再構築など学校内で努力できることもあります。例えば、会議や出張を減らす工夫をする、会議には必ずたたき台や論点整理メモを用意する、新しい研修項目を一つ入れるなら従来の項目を一つ削る、といった取り組みはとても大事だと思います。

社会の変化を受けて教育が変化し、それを最も早く敏感に感じるのは子どもたちです。歴史的転換期にある今こそ、中学生という大切な時期の学びをプロである教師が中心となって、社会全体で育んでいくことが求められています。

中学校教師が語る　私が一番大切にしていること

中学校の教師ということだけではなく、常に生徒と共に歩み、互いに成長していくことを大切にしたいと思います。生徒の夢の実現に向けて、どのように生徒たちと取り組むか、そのための支援を行うかが教師の役目だと考えています。いろいろなことがありますが、これを忘れてはだめだと考えています。（福島県／I中学校／S・T）

「公平」。生徒の側から見て、最も教師に求められる資質であるから。（岡山県／T中学校／I・S）

インタビュー これからの中学校教師像

中学校教師に求められるのは多様な変化に対応できる世界観

早稲田大大学院教職研究科教授 油布佐和子

新しい学習指導要領への対応、ベテラン教師の大量退職による技術継承の問題、公教育の意義の問い直し――。現在、中学校現場には数多くの課題がある。その中で、これからの中学校教師には何が求められるのか。早稲田大大学院教職研究科の油布佐和子教授にうかがった。

ゆふ・さわこ◎東京女子大卒業。埼玉県で中学校教諭として勤務した後、東京大大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。福岡教育大教育学部教授などを経て、2008年から現職。専門は教育社会学、教師論。著書に『転換期の教師』（放送大学教育振興会）など。

公教育の意義をもう一度捉え直す

公立中学校という教育段階の意義を改めて考えると、最も重要なことは、それが「公教育」であることではないでしょうか。公教育とは、家庭階層を問わず多様な子どもが共通の教育を受けられること、そして、高校・大学へと進んでいく可能性をすべての子どもに与えることです。1960年代までは、教育機会が均等にあることの公教育の意義や喜びが、社会において実感されていました。しかし、経済的に豊かになった今、それがあまり感じられなくなっているようです。

1970年代には中学校で校内暴力の嵐が吹き荒れましたが、それは学校と社会とのずれが生徒の心の中に積もり、顕在化したのだと思います。ところが、今や中学校は、生徒が乗り越えたり、ときには壊したいと思うことすら少ない状態になっているようです。特に東京都などの大都市では、目的意識の高い家庭の子どもの多くが私立の中高一貫校に進学しています。ますます公立中学校の存在意義が問われているのです。これが、今の中学校教育が抱える最も大きな課題だと考えます。

しかし最近の教育改革は、この課題を解決するというよりは、むしろ学校現場の混乱に拍車をかけている面があるようです。公立中学校でも学校選択制を取り入れている地域がありますが、それは公教育の趣旨とは少し違うと私は思います。

変わりゆく社会に対応しようと、教育政策が次々と打ち出されています。社会の変化に応じて教育が変わ

っていく今だからこそ、**公教育の意義を改めて捉え、教師がすべきことを考える必要があると思うのです。**

自分なりに教師としての世界観を持つ

教師に求められていることは大きく二つあると、私は考えます（図1）。一つは、社会観や将来観といった教師として核となる世界観を持つこと、もう一つは、教師同士の自主的なつながりを取り戻すことです。

教育の役割は、子どもにさまざまなことを教えて一人前に育て、子どもを通して未来の社会をつくることです。しかし今の教育では、目の前にいる子どもの姿ばかりに焦点が絞られているのではないでしょうか。どのような社会をつくるのか、そのために子どもに何を伝えるべきか、そうした視点を忘れがちなのが現状だと思います。

そこで大切になるのが、社会観や将来観を持つことです。教育は原則的に、より良い世界を実現しようとする理念先行型で進めるものです。より良い世界とは、環境問題を心配しないでよい世界かもしれません。安心・安全な社会かもしれません。自分はどのような世界を目指したいのかを考えることが大切なのです。その上で、例えば経済不況や環境問題に直面したとき、子どもにどのような力があれば乗りきれるのかといった視点が必要です。

そう考えると、教師がしなければならないことが見えてきます。**いわゆる「学力」を身に付けさせるだけでなく、子どもたちが20年後、30年後に大人になったときにどのような力が必要なのか、そうしたことを見越して、中学校では何ができるかを考えていただきたいのです。**子どもの世界と、子どもが見ているより遥か遠くの世界。この二つの世界を両方考えられる先生であれば、子どもは「一緒に楽しく過ごしているけれど、やっぱり先生は違う」と思えるのではないでしょうか。

社会観や将来観を持つためには、人は何のために生きているのか、どうして生きるのかといった人生観も必要です。「なぜ学ぶのか」という子どもの問いかけに対して「高校入試があるから」と答えるだけでは、先生は単に子どもを高校に送り出すだけの存在になってしまいます。教師自身の人生経験を基に自分なりに答えられなければ、子どもは納得して、教師を信頼することはないでしょう。

難しいかもしれませんが、自分なりの教育哲学や人間哲学をつくり上げていただきたいと思います。

ベテランと若手が「伝え合える」関係を

自分なりの世界観や教育観を考えるといっても、1人では限界があります。そこで求められるのが、二つめに挙げた「教師同士の自主的なつながり」です。

私が行ったある調査では、若手教師ほど教員評価を望む傾向にあるという結果が出ました。これは、自分が頑張っていることをだれかに認め

図1　中学校教師に求められていること

1　教師として核となる世界観を持つ

■今、目の前の子どもたちの世界
■20年後、30年後の世界

両方の視点から、子どもが大人になったときに必要な力を考える

▼

今、中学校で指導すべきことが明確になる

2　教師同士の自主的なつながりを持つ

子どもをどのように指導していくのかを共有する

例：学年団を通じた、ベテラン教師と若手教師とのコミュニケーション

▼

自分なりの教師観、教育観が見えてくる

中学校教師が語る　私が一番大切にしていること

生徒から信頼されることが重要です。教師が生徒に対して中途半端で、いい加減な気持ちで接すれば、生徒も教師に対して同じような気持ちを持つと思います。また、教科指導においては、専門知識はもちろん、教育のプロとしてうまく伝わるように指導することを心がけています。それは、生徒指導、部活動等でも同様です。（香川県／O中学校／F・M）

中学校教師が語る 私がやりがいを感じた瞬間

二十数年前、学校に不信感を持ち、常に反抗的な問題行動をとる男子生徒の担任が続きました。毎日がむなしく本当に心も体も疲れきっていました。何とか卒業させた数年後、成人したその生徒から「先生一杯やりましょう！」と誘われ、楽しい時間を過ごしました。感涙と共に教師の喜びを痛感しました。（新潟県／下田中学校／若林久）

てもらいたい、という気持ちの表れではないでしょうか。校長などの管理職に評価されるだけでなく、教師同士が互いに認め合える関係を求めているのだと思います。

教師も生徒も、みんな精一杯頑張っています。ただ今は、教師と教師、教師と生徒との関係が希薄になり、「個人化」しているのです。

特に若手教師は、集団を少し煩わしく感じているのかもしれません。自分が好きなことにそれぞれ取り組んでよいという、個別化された文化の中で育ってきた世代だからです。学級や班といったあらかじめ決められた集団での行動は経験していますが、一人ひとりが手をつないで、自主的につながりをつくっていくという経験をしたことのない教師が増えているのです。

先生方は授業や日常業務に忙しくて、互いに話す機会がなかなか持てないかもしれません。しかし、ベテランの先生方は、今までどのような思いを込めて教師を続けてきたのか、若い先生にもっと伝えていただきたいと思います。そして、若い先生方は、どのようにして教師同士が協力してきたのか、教育観を語り合ってきたのか、ベテランの先生の話に耳を傾けてください。そこから得られることが必ずあるはずです。

教師間で1年後、3年後の具体的な目標を共有

ベテラン教師と若手教師の文化的な違いがコミュニケーションの壁になっていることもあるでしょう。しかし、学年団でまとまっているのが中学校教師の強みです。学年団のチームワークが取れていれば、たいていの問題は解決できると思います。

学年団のチームワークを高めるために、学年の短・中期的な目標を立ててみてはどうでしょうか。短期目標は「1年後に生徒をどのレベルまで成長させるか」、中期目標は「今年入学した生徒に、3年後にはどのような姿で卒業してほしいか」といったことです。

目標を立てる際に注意したいのは、抽象的な内容ではなく、生徒がどのような行動ができるようになるのかまで具体的な項目を挙げることです。例えば、「思いやりのある生徒」ではなく、「隣の席の生徒が欠席したときに、声をかけてあげられる生徒」と具体的な言葉で表すのです。具体的な目標を共有していれば、それに沿って学級経営や授業を組み立てられます。教師間に多少の考え方の違いがあっても、学年団としての足並みをそろえられ、チームワークは自然と高まるものです。

目標があれば、「指導すべきこと」と「そのままにしてよいこと」の取捨選択がしやすくなります。生徒が何か問題を起こしたとしても、目標に当てはまらない小さなことならあまり気にしないでかまいません。生徒が失敗や悪いことをしても、その経験が役に立ち、3年後、あるいは大人になって克服していれば問題ないからです。

教育においては、長らく「開発の物語」とでもいうべき考え方が支配的でした。明るい日の当たる面だけを重視して、人は、能力や可能性を一方向に直線的に開花させていくと

図2　校内外のネットワークづくり

校内　学年団で短・中期的な目標を掲げ、教師間で共有化する

短期目標は「1年後に生徒をどのレベルまで成長させるか」、中期目標は「今年入学した生徒に、3年後にはどのような姿で卒業してほしいか」など。生徒の具体的な行動を言葉にする。

- 目標に沿って学級経営を行い、授業を組み立てられる
- 指導すべきことと、そうでないことを判断しやすくする

校外　福祉、経済、環境など、教育以外にも目を向ける

学校だけでは解決できない問題には、保護者や地域、社会活動団体などの支援を仰ぐ必要がある。外部との連携を図るためには、福祉や経済、環境など、教育以外の分野にも教師自身の視野を広げ、課題の背景を知ることが重要になる。

いう考え方です。しかし、こうした捉え方は、「成長」の意味を貧しくさせます。病や老いや、生活・人生のさまざまな課題に向き合い対処できる力を、少しずつでもつけていかねばなりません。

子どもたちの失敗、逸脱や戸惑い、立ち止まり、反発も、成長の契機と捉え、子どもの成長を長期的な視点から見ることが必要でしょう。

学校外にも目を向け協力を仰ぐ

学校内の集団づくりだけでなく、学校の外へとネットワークを広げていく視点を持つことも大切です。例えば、家庭環境に問題があるために生活態度が乱れている生徒を学習に向かわせようとしても、教師だけの対応には限界があります。家族でなければ解決できないことを、いくら公教育といっても学校が引き受けるわけにはいきません。学校だけではどうにもならない課題は、学校の外に支援を求めてはどうでしょうか。

オーストラリアのある事例では、家庭に問題がある生徒に対して、地域や福祉団体、NPO、そして教師がチームを組んで働きかけています。学校の中で対応できる課題は先生が担いますが、例えば生徒が朝食を食べてこないなら、地域や福祉団体の人たちがその家庭を援助します。

そうしたネットワークをつくるためには、応援してくれる家庭や地域、社会活動団体などの人たちを味方に付ける工夫が必要です。学校の活動に協力的な保護者がいれば、その保護者を起点にしてネットワークを広げてはいかがでしょうか。

家庭や地域が抱える課題の背景を知り、学校の外部との連携を図るためには、福祉や経済、労働、環境など、教育以外の分野へと視野を広げる必要があります。**学校外に目を向ければ、どのような社会をつくらなければならないかといった目標も見てくるはずです。**集団づくりは、社会観・将来観を考えることと密接に関連しているのです。

「未来の社会をつくる」教師ならではのやりがい

多様な子どもたちに対応できるように、教師には「引き出し」を数多く持つことが求められます。経験に裏打ちされた生き方のことです。教師も右肩上がりに成長していくわけではありません。試行錯誤し、右往左往しながらも、10年後、20年後に、今の自分よりも「望む自分」に近付いていればよいのです。その過程での失敗や間違いを一つずつ糧にしていくことが、引き出しを増やすことにつながり、ひいては自分の言葉で、自分の世界観を語れる教師へと成長していけるのではないでしょうか。

先生方は日々、目の前の子どもと向き合うことに追われていると思います。しかし、**「未来の社会をつくる職業」**という教師の原点に是非立ち返ってください。それを意識するだけでも、中学校教師として感じられるやりがいが大きくなると思います。

中学校教師が語る 私がやりがいを感じた瞬間

卒業生が立派に成長したのを見たときです。両親とうまくいかず、家出すると言った生徒がいました。必死に生徒と話し合い、その生徒を全寮制の看護学校に進学させました。数年後、私の掛かり付けの病院で看護師となったその生徒に再会。自分は人を救うことができたのかもしれないと思いました。（千葉県／S中学校／I・M）

生徒にいろいろな角度から粘り強く働きかけ、生徒の前向きな気づきや成長、達成感や次への意欲が見られるときは、自分の努力が報われる一瞬です。なかなか多くは出合えませんが、私が投げかけた言葉が生徒の心に響いたと感じられる反応が返ってきたとき、日頃の疲労も吹き飛びます。（滋賀県／鳥居本中学校／吉嵜治彦）

私の指導エピソード
挑んだ！越えた！
あの瞬間

一人ひとりと向き合う大切さを教えてくれた「アメ玉事件」

東京都足立区立上沼田中学校校長 森永徳一

Morinaga Tokuichi

もりなが・とくいち　教職歴30年。社会科担当。大学院修了後、私立校に3年間勤務。その後、東京都内の中学校に赴任。2001年度から校長。

アメ一つから始まった夜9時までの学活

あれは、私が教師となって4年目の出来事でした。その学校では毎年秋に2年生対象の音楽鑑賞会が上野のホールでありました。2学年担任の私は引率のため、会場の最後列で学級の様子を見ていましたが、生徒が時々、下を向くのに気づきました。演奏を聴くだけなのになぜだろうと不思議に思いましたが、静かな様子だったので、そのまま過ごしました。

大勢の生徒を校外に連れ出すのですから、教師は多少なりとも緊張します。帰りの車中は静かで、何事もなく学校に戻りました。あとは鑑賞会の感想文を書かせ、帰りの学活をして終わりです。やれやれと思いながら教室に入ると、ぷんとアメのような甘い匂いが鼻につきました。なぜそのような匂いがするのか。何かおかしい。私は感想文を回収したあと、生徒にこう言いました。

「アメのような匂いがするけれども、何か悪いことをしていないよな」

すると、もうすぐ帰れるとざわついていた教室が急に静まり返りました。「もし鑑賞中にアメをなめていたとしたら、それは許されないことだ。正直に答えなさい」と言うと、生徒は皆、黙っています。だれかがアメをなめていたのは明らかでした。

「この場で言えないなら、私は職員室にいるから1人ずつ来なさい」

私は、「うそをつかない」「いじめない」「人の話をしっかり聞く」「時間を守る」「何事も真剣に取り組む」ことを学級の約束として、学級開きの際に生徒に伝えていました。私はアメをなめたことはもちろん、それを黙っているのが許せなかった。この事態を見すごしてはならないと思ったのです。

最初の生徒が職員室に来ました。

「演奏中にアメをなめていたのか」

「……はい」「どうしてアメを持っていたんだ」「もらいました」「だれから」「Aさんから」「どうして演奏中になめちゃいけないのかわかるか」

「……」「答えが言えるまで1人で考えて、また来なさい」

そのようなやりとりを1人ずつ続けるうちに、学級全員がかかわっていることがわかりました。ある女子生徒がアメを数袋持ってきて、トイレで数人に分け、その生徒たちが学級全員に2、3個ずつ配っていたのです。ポケットにしまっていた生徒もいましたが、大半はなめていました。学級委員や生活委員も例外ではありませんでした。

生徒と一対一で話すうちに、私はこの機会を逃してはならないと思い始めました。人がしてはならないことをしてしまったとき、どうすればよいのか。なめなかったとしても、アメを差し出されたときにどう対応すればよかったのか。自分自身と向き合い、答えを出させるチャンスだと思ったのです。今しっかり考えさ

せれば、これから何事にも真剣に取り組めるようになる。時間がかかっても考えさせよう、と。

40人全員と1回ずつ話し終わったころには日が暮れていました。「子どもが帰ってこない」と、何人もの保護者から電話があり、学校に来た保護者もいました。教頭と学年主任には「学活が長引いています。何があったのかは、帰宅後にお子さんから聞いてください」との保護者への対応をお願いしました。学活は学級全員が参加するものです。今ではこうした指導はなかなか難しいのですが、そのときの私は全員から答えを聞くまで、学活を終わらせるつもりはありませんでした。初めは「帰しなさい」と言っていた教頭と学年主任も、私の決意を感じ取ったのか、保護者対応を引き受けてくれました。

学級の一人ひとりが自分の過ちと向き合った

1回目には、ほとんどの生徒が、なぜアメを食べてはならないのか、理由を言えませんでした。しかし、2回目には大半の生徒が「一生懸命に演奏している最中に食べるのはよくない」「友だちに勧められてもだめなものは断る」と言いました。でも、「そのときにならないとわからない。絶対にしないとは言えない」と言う生徒もいました。「もうしません」と言えば私は許すとわかっているはずなのに、正直だなあと思います。ただ、「だめなものはだめ」と理屈抜きで言い切ることが大切と思い、「もう一度考えてこい」と教室に戻らせました。アメを持ち込んだ生徒は職員室に何度も来て、「悪いのは私で、ほかの人は悪くない。許してほしい」と泣きながら謝りました。その反省は受け止めた上で、今や学級全体の問題だから、私の気持ちは変わらないと伝えました。

全員から反省の言葉を聞き、私が教室に向かったのは、夜9時を回ったころでした。40人が神妙な面持ちで席に座っていました。私が教壇に立つと、生活委員の女子生徒がすっと手を挙げて立ち上がりました。

「アメを持ってきたAさんは確かに悪いけれども、私たちはアメを受け取りました。『やめなよ』と注意して先生に預かってもらえばよかった。Aさんだけを責められません。先生が怒るのは当たり前です。ごめんなさい」

生徒の言葉を聞き、私は胸が熱くなりました。時間はかかったけれども、生徒に自分の過ちと向き合わせることができたと。あとでほかの先生に聞いたのですが、私が職員室にいる間、教室では1人として話をする者はいなかったそうです。確かに私は「相談するな、自分で考えろ」と言いましたが、本当にだれかと話し合うこともなく、それぞれが1人で考えていたのです。

生徒の発言が終わると、私はうなずき、5時間に及ぶ学活の終わりを静かに告げました。

その後、学級は私の予想以上に成長しました。修学旅行では行く先々で行儀の良さを褒められ、3年生の学級替え後は各学級の中心的存在になりました。学習面の成長も著しく、東京都を代表するような進学校に進んだ者も数多くいました。担任として誇らしく思う集団になりました。

全体を指導しようとする前に、まず一人ひとりと向き合わなければ、学級をまとめることなどできない。この事件は、私の学級経営に対する基本的な考え方を決めました。これは校長となった今も変わりません。「学級」から「学校」へと集団の規模は変わりましたが、個にきちんと対応できなければ、集団をまとめることができないのは同じだと思うからです。私はこれからもあの日と同じような気持ちで、生徒一人ひとりと向き合っていこうと思います。

生徒の成長を実感できるときです。生徒会長としていまひとつ頼りなかった生徒が、今の学校の状況を一緒に考える中で、生徒集会を自ら企画運営し、自分の考えを全校生徒に力強く主張しました。その後も、学校改善に対して粘り強く取り組み、荒れていた校内の雰囲気が徐々に変化していきました。（長野県／E中学校／T・M）

新任4年目に荒れた学校に転勤。私にとって試練の1年でした。公立高校合格発表の日、問題行動の多かった男子生徒が母親と来て、キラキラ輝く目で、元気よく合格のお礼を言ってくれたのです。1年間の疲れが消え去りました。これまで私が教師としてやってこられたのは、あのときの喜びがあるからです。（大阪府／T中学校／M・K）

私の指導エピソード
挑んだ！越えた！
あの瞬間

労を惜しまず生徒と一緒に授業をつくる

長野県長野市立柳町中学校教諭 新井 仁

Arai Hitoshi

あらい・ひとし　教職歴20年。数学科担当。3学年担任、同主任。長野県内の公立中学校、信州大教育学部附属長野中学校を経て、2004年度から同校。

授業は生徒との会話のキャッチボール

「先生、娘が『数学の授業が面白い』って言うんですよ」

2学期末に行う保護者懇談会の終了後、1人の保護者が話しかけてきました。その言葉に、私は思わず涙がこぼれそうになりました。その生徒は決して数学が得意ではありませんでした。だからこそ、私の授業スタイルやそこに込めた思いが、生徒に着実に伝わっていると感じたのです。

担任を務める学級は、1年生のころから生徒指導上の課題が目立ちました。2年生1学期の始業式で担任が発表された時には「えっ、担任が変わるのか」と生徒がざわつきました。柳町中学校では慣例として進級に伴う学級編成替えがなく、担任も3年間代わらないからです。そのため、担任となった私に向けられたのは、生徒の疑心暗鬼の目でした。生徒と信頼関係を結ぶには何をすべきか。私は「この学級の生徒に魅力ある授業をする」ことに最も力を入れました。

授業は今日の課題を掲げることから始まります。「スギ花粉の飛散量を予測する」や「最も利益の出るコンサートチケットの価格を設定する」などの課題に、生徒は最初、「これは数学の授業？」といぶかしがりました。生徒の生活に密着した課題を出すのは、数学は単に公式を覚えるものではなく、毎日の生活に役立つと実感し、実際に使える力を生徒に身に付けてほしいからです。

スギ花粉の課題について、生徒と共に解決の糸口を探ります。「これらの表にはどんな特徴が見られるかな」「日照時間が長いと、次の年の花粉量が増えている」「そうだね。ほかの気象条件ではどうかな」。私が問いかけ、生徒が考え、また私が話す。既習のどの知識を使えば解決できるのかを考えさせようと、会話のキャッチボールを積み重ねます。

担任になってしばらくは、学級の反応は薄いものでした。でも、生活に役立つ内容を扱い、生徒が面白いと思う授業を続ければ、私の問いかけに応える生徒がだんだん増え、その様子を見てほかの生徒も加わってくるはず。私は、生徒の様子を見ながら素材を見つけて教材化し、生徒と共に課題をすえて、学級全員が取り組める授業にしようとしたのです。

「数学って難しいけれど、面白い！」

今では私なりの授業法が確立していますが、20代のころは試行錯誤の連続でした。特に新卒のころは、自分の中学時代を振り返り、「生徒もこれくらいできて当たり前」と思って授業を進めていました。自分ではわかりやすい授業をしているつもりでしたから、理解できない生徒にいら立ち「何でこんなことができないんだ」と怒ったこともあります。授

業を聞かない生徒を問い詰めた末に、「だって、先生の授業がわからないんだもん」と言われたこともあります。生徒を見ずに授業をしているのは自分なのに、理解できないことを生徒のせいにしていたのです。今思い出すと恥ずかしい限りです。

自分の授業がなぜわかってもらえないのか。悩んだときには、大学時代の恩師や数学教師の仲間に相談しました。数学教師の自主研究会にも所属し、勉強会に参加しました。生徒の把握、素材の選び方、板書法などを学び、授業で取り入れ、うまくいかなかったら別の方法を試し――を繰り返しました。もちろん、今も続けています。

今の授業スタイルが形づくられてきたのは30代になってからです。「教材研究」とは「素材研究」だけを指すのではない。よい素材を用意するだけではなく、素材を生徒の実態に合わせて生かす方法を考えるのが教材研究だと気づいたのです。それからは、デジタルカメラを持ち歩き、教材になりそうなものを撮るなど、常に面白い素材はないかと探しています。

そのころには、自分が理想とする授業が明確に描けるようになっていました。それは、「数学って難しいけれど、面白い」と生徒に言われる授業です。一つの学級には、数学が得意な生徒もいれば、苦手な生徒もいます。学力や関心に差があっても、学級全員が一つの教室で同じ授業を受け、かかわり合って学ぶ。それが、多様な子どもが学ぶ公立学校が目指すべき授業だと思うのです。

授業こそ生徒との信頼関係の根幹

「先生、わかった！ 俺、天才かも」

2年生の2学期、学級での授業中に、ある生徒がひときわ大きな声を張り上げました。4月ごろには無気力さが目立った生徒でしたが、次第に授業に集中し、発言するようになったのです。問題行動も減り、学校行事やほかの授業にも積極的な態度を見せるようになりました。

教師の根幹は「授業」だと思います。部活動を一生懸命に指導することも、生徒の悩みを親身になって聞くことも、教師としては大切なことです。しかし、魅力のない授業をする教師にだれがついていくのでしょうか。一斉授業でどうすれば生徒全員からの信頼を得られるのか。個に対応するための素材の選び方、授業の進め方、生徒への話しかけ方……そのどれもが難しいのですが、私は「ずくを出して」取り組んでいます。長野県の方言で「労を惜しまず、よりよいものを目指して努力する」という意味です。生徒の実態を把握するのも、生徒に合った教材をつくるのも、決して妥協せずに取り組む。そうした教師の「本気」を、生徒は感じ取ってくれるのだと思います。

生徒との信頼関係が崩れたときに、教室へ向かうのは本当に辛いものです。それでも教師を続けてきたのは、生徒の成長を感じられる瞬間があるからです。中学校はたった3年間ですが、子どもから大人へと最も成長する時期。その変貌ぶりを喜び、ちょっとしたことにも感動できるのが中学校教師の醍醐味だと思います。

自分が担当している教科の数学に興味を示す生徒が増えたり、「先生の授業が待ちどおしい」などと言われると、天に昇るような気になります。もう一つは、自分が担任しているクラスの生徒を見ていて、「とてもいいクラスだな。思い出がたくさんつくれて、うらやましいな」と客観的に思えたときです。（千葉県／堀江中学校／桂林良哉）

生徒と部活動で目標に向かって頑張った結果、目標を達成し、共に喜ぶことができたときは、教師をしていてよかったと思います。また、問題のある生徒と3年間向き合い、指導を続けてきた結果、卒業式でその生徒が「ありがとう」と泣きながらお礼を言ってきたとき、本当に教師になってよかったと思いました。（愛知県／鳴子台中学校／小栗誠）

私の指導エピソード
挑んだ！越えた！
あの瞬間

時間がかかっても待ったことが生徒を一歩、大人にさせた

静岡県掛川市立栄川中学校教諭 鈴木一由

すずき・かずよし　教職歴25年。保健体育科担当。教務主任。袋井市立袋井南中学校、森町立森中学校等を経て、2007年度から同校。

Suzuki Kazuyoshi

だれが壁に穴を空けたかは問題ではない

職員室の私のロッカーには、お菓子の空き箱がいつも入っていました。生徒が壁に空けた穴を、空き箱の厚紙で塞ぐためです。10年ほど前に勤めていたその中学校の生徒は、特に荒れていたわけではありませんが、少し落ち着きがないところがありました。叱られると我慢ができずに、物に当たってしまう3年生が何人かいたのです。高校受験を控えて、気持ちがいら立っていたのかもしれません。体の成長に心の成長が追い付いていなかったこともあったのでしょう。

「できるだけ早く対応したいですね」

当時3学年主任だった私は、教頭や生徒指導の先生と今後の対応について話し合いました。こういうときは、とにかく穴が空いていたり汚れたりしているのを放っておかないことが肝心です。学びの場である校舎はいつも清潔できちんとしていなければなりません。壊れたまま、汚いままにしておくと、それが平気な学校になってしまうからです。

私たち3学年団は、穴を塞げる大きさにベニヤ板を切って貼り始めました。でも、ベニヤ板を切り貼りするのは、結構時間がかかります。しかも、一つ修理をしても、しばらくすると別な場所の壁にまた穴が空いている――。この繰り返しで、ベニヤ板の在庫はすぐに底をついてしまいました。そこで出てきたのが、「板ではなく、紙でもよいのではないか」というアイデアでした。私たちは家にあった空き箱を学校に持ってきて、板の代わりに空き箱の厚紙を貼り始めました。

実は、穴を空けている生徒の見当はついていました。でも、当事者を見つけ出して注意するだけでは意味がないとも思っていました。注意をするだけだったら、その生徒は一時的に物に当たらなくなったとしても、しばらくしたら隠れて空けるようになるでしょう。大切なのは、自浄作用の働くような学年集団、学校集団をつくることです。

生徒自身が自分の行為が悪いことであると気づく。あるいは、まわりの生徒が注意する。そこに至るまでには時間がかかるとわかっていましたが、私たちは生徒を信じて、黙々と厚紙を貼り続けたのです。

一つひとつの「できた」が大きな幸せを生む

こうした指導方針をとった背景には、私の初任校が特別支援学校だったことが大きいと思います。その3年間の経験は、私の教師としての姿勢をつくるのに重要な意味がありました。

私は、採用を知らせる電話が自宅にかかってきた翌日、教育事務所に

出向き、その足で赴任する特別支援学校に向かいました。先輩の先生方への挨拶も早々に教室に連れていかれ、「あそこに座っているのが、鈴木先生の受け持ちの子どもたちです。今から給食を食べさせてあげてください」と言われました。

私は、大学で特別支援教育について特別に勉強したわけではありません。何をどうすればよいのか、戸惑いの連続でした。とにかく先輩の先生方の姿を見て、話を聞いて、自分がここで何をすべきかを学んでいきました。

特別支援学校の子どもができるようになることは、それほど多くはありません。例えば、50mしか歩けなかった子どもが1年間かけて100m歩けるようになる、スプーンを使って食べられなかったのが自分ですくって食べられるようになる、といった具合です。そうした一つひとつの「できた」が、子どもにとっても保護者にとっても、大きな喜びであり、幸せなのです。

何かを指導するというよりも、目の前の子どもがどうすれば自分の力で生きていけるようになるのか。長い時間の流れの中でその小さな一つをつくることが、この場所で自分にできる唯一のことだと思いました。生徒が自分の力で変わるまで待てるようになったのは、この経験があったからかもしれません。

そして、壁に穴は空かなくなった

夏休みが過ぎても、私たちが厚紙を貼る日々は続きました。次第に私は、単に厚紙を貼るだけでは面白くないなと思い始めました。「もしかして生徒が何か感じてくれるかもしれない」と思い、厚紙に「こんなことをしても意味がないよ」と書いたり、日付と自分の名前を記したりしました。

あるとき、「穴が空いている」と生徒に知らされて駆け付けると、壁ではなく、私たちが貼った厚紙にポツンと穴が空いていました。生徒は少しずつ変わっている――。居合わせた教頭と思わず顔を見合わせ、うなずきました。

そして、秋ごろのことです。教頭が穴に厚紙を貼っていたときでした。

「先生、大変そうだな……」

穴を空けていたと思われる生徒が近寄ってきて、ボソッとつぶやいたそうです。それ以来、壁に穴が空くことはなくなり、私たちが空き箱を家から持ってくることもなくなりました。

当時、教師間で考えの違いが多少あっても、学年全体、学校全体を良くしていきたいという気持ちはお互いに持っていました。思春期の子どもには気持ちを抑えられずにいら立つのはよくあることだと受け止め、紙を貼る作業を楽しむくらいの気持ちでいました。そうしなければ、生徒の心の余裕がなくなってしまうからです。だから、どの先生も「犯人捜し」をすることなく、待つ指導ができたのだと思います。

教師の足並みがそろってさえいれば、生徒は確実に変わっていく――。私はそう実感しています。

私は生徒が卒業するとき、卒業証書と一緒に生徒の名前を折り込んだ句を書いて渡しています。例えば、看護師を目指す生徒には、「病室に香りとどける花となれ」という句を贈りました。先日の同窓会で、看護師になった生徒から「先生が書いてくれた句は、今も部屋に飾っています」と言われ、嬉しかったです。（長崎県／S中学校／M・M）

先日教え子の結婚式に招待されました。私は式の中で、「先生との出会いがあったから、私は中学校の先生になりました。先生と会えたから現在があります」というメッセージと共に紹介されました。恥ずかしいくらいでしたが、嬉しかったです。（新潟県／東中学校／北村泰）

私の指導エピソード
挑んだ！越えた！
あの瞬間

生徒と向き合う苦しさの中で私を変えた先輩の一言

宮城県仙台市立山田中学校教諭 佐竹朋子

Satake Tomoko

さたけ・ともこ　教職歴12年。英語科担当。生徒指導担当。1学年副担任。仙台市立松陵中学校を経て、2000年度から同校。

想像を超える「荒れ」に翻弄された日々

「先生、手が汚れちゃった」

そう言って、給食で汚れた手を私の服でぬぐう生徒。私は唖（あ）然として声も出ません。叱るべきなのか、笑うべきなのか、瞬時に判断できない。

「どうしていいのかわからない」

これが、私が9年前に山田中学校に赴任した直後の率直な思いでした。

教職に就いて4年目の私は、2学年担任となりました。前任校は学力レベルが高く、生活面でも手がかからない生徒ばかりだっただけに、当時の本校での生徒指導の厳しさは想像以上でした。朝は廊下でたむろしている生徒を教室に入れることから始まります。昼食は落ち着いて食べられず、放課後は問題を起こした生徒の対応に追われました。耐えきれずに、校長先生にお願いして途中で帰らせてもらったこともありました。

生徒指導に苦しんでいた私を支えてくれたのは、当時、本校の生徒指導主事だった鶴岡勝彦先生でした。鶴岡先生は、その時々において私がすべきことを事細かに指示したりはしませんでした。自身の姿を通してあるべき姿を見せてくれる、それが先生の後輩育成法でした。

問題を起こした生徒について外部機関に出向いて話を聞いたり、保護者に会って説明したりするときには、鶴岡先生の後ろに付いてその対応をしっかり学びました。鶴岡先生は、問題が起きると真っ先に生徒に問いただして事実を整理し、今後の対応も含め、保護者が納得できるようにきちんと伝えていました。そうすることで、トラブルを起こさずに保護者の協力を得られるとわかりました。

ただ、鶴岡先生は重大事件でこそ陣頭で指揮を取るものの、普段は担任を立てるよう気を配っていました。休み時間には担任を教室にいるようにさせ、教師と生徒のコミュニケーションを促したのもその一つです。「生徒指導の最前線に立つのはあくまで担任」と、決して私たちより前に出ることはありませんでした。

生徒の気持ちをありのまま受け止める

転機は赴任半年後に訪れました。学級には、担任の私だけでは解決できないような問題を起こす生徒がいました。その生徒にどのように接すべきかを考えあぐねていた私に、鶴岡先生はこう言いました。

「生徒を受け止める役割に徹しなさい」。私ははっとしました。私は、自分の学級のことは、すべて自分で解決しなければならないと肩ひじ張っていました。その一言で、自分1人で背負い込まなくてもよいということに気づいたのです。

それからは、生徒をむやみに叱ったり、何かを強制したりするのをやめ、生徒の思いをひたすら受け止め

自分の教え子が、自分と同じ数学の教師になったり、昔を振り返って「先生の授業はわかりやすかった」と評価してくれたりすると、嬉しいです。そのほかにも、テスト前に質問に来た生徒に教え、「わかった」と言って帰っていくとき、授業を生徒と私とでつくり上げたと思えたとき、さまざまな瞬間でやりがいを感じています。（三重県／T中学校／E・K）

るよう心がけました。生徒の話には誇張や矛盾も少なくありませんが、まずは否定せずにひたすら耳を傾ける。すると、次第に生徒から積極的に話しかけてくるようになり、それまで話してくれなかった生徒の思いや家庭の事情などを語るようになりました。生徒の懐に飛び込んで、内面を引き出すことができるようになっていたのです。

それからは、生徒と接していても気が楽になりました。生徒からも「先生も大変だね」「昨日も遅かったの？」と声をかけてくれるようになりました。その一言ひとことが、教師としての自信につながっていきました。

逃げ出しそうになった日々から9年が経ち、今は副担任と学年全体の生徒指導担当を兼ねた立場になりました。生徒指導に自信が持てるようになったが故に、生徒に近付きすぎてしまうこともありましたが、今は生徒と適度に距離を置くように意識しています。また、指導の最前線にいるのは担任の先生方です。学年が一つのチームとなって指導できるように、担任が生徒と共に過ごす時間を多く確保できるように、自分の立場でできることをしようと心がけています。私が一番辛かったころに鶴岡先生の後ろ姿から学んだことです。

生徒と接する以上、経験年数や年齢、立場は関係ありません。だからこそ、ほかの先生方の仕事の様子や、生徒に対する所作の一つひとつが、よい教材になると思うのです。鶴岡先生がそうしていたように、これからは私自身の後ろ姿で教師としてすべきことを、若い先生たちに伝えていきたいと思います。

先輩教師の言葉

宮城県仙台市立宮城野中学校
生徒指導主事
鶴岡勝彦

生徒の本音を引き出す指導に脱帽

佐竹先生が赴任した当時の学校は、さまざまな生徒指導上の問題を抱え、大変な状況にありました。先生方には、自分にも言い聞かせるという意味もあり、「何とかなる」と口癖のように言っていましたが、正直そうなると思える状況にはありませんでした。

生徒指導主事として最も意識したのは、担任の負担をなるべく減らすこと。最前線で生徒と接する担任は生徒との対話に専念し、外部機関や保護者との折衝は生徒指導部が行うという風に、役割分担を明確にして、担任が問題を１人で抱え込まないように配慮しました。

それでも次第に、先生方の表情には疲労が色濃く見えるようになりました。特に、佐竹先生は前任校とのギャップにかなり苦しんでいたようです。ただ、先生なら生徒とよい関係を築けるだろうという確信もありました。実際、指導のコツをつかんでからは、どんどん自信に満ちた顔つきになっていったのには驚かされました。

それに伴い、生徒指導に役立つ多くの情報が、佐竹先生経由でもたらされるようになりました。生徒の本音を聞き出すことに関しては、私よりも断然うまい。私は生徒を一喝するタイプですが、聞き役の佐竹先生との役割分担がスムーズにできたからこそ、お互いの持ち味を出し合えたのだと思います。また、佐竹先生はノウハウを吸収することに貪欲でした。若手の先生の中には事細かに教えないとなかなか実行できない方もいますが、佐竹先生はいろいろな先生から何でも学び取ろうとしていました。

これからは、佐竹先生が若手教師にノウハウを伝授する番です。持ち前の明るさを発揮して、まわりの先生方の意欲を引き出してほしいと思います。

卒業生が「先生になりたい」と教育実習に来ました。その生徒が、私とのかかわりを通じて教師を目指したと言ってくれたのです。当時は、生徒にきついことを言ったこともありましたが、いずれはその子のためになると信じてとった行動は、必ず生徒に伝わるのだと実感させてくれました。（宮崎県／Y中学校／N・M）

私の指導エピソード
挑んだ！越えた！
あの瞬間

独りよがりの「サービス」に酔っていた新任時代からの脱却

岡山県岡山市立岡輝（こうき）中学校教諭 西村誠博

にしむら・よしひろ　教職歴11年。国語科担当。生徒指導主事。岡山市立福浜中学校を経て、2002年度から同校。
Nishimura Yoshihiro

「教師はサービス業」と思い込む

10年前、まだ駆け出しの教師だったころ、私は「教師はサービス業である」と思って、指導に当たっていました。

その徹底ぶりは、今考えるとあきれるほどです。教師に休みなんてない、どのような無茶な要求でもきちんと応えるのがよい教師――。そう思って、自分の携帯電話の番号を公開し、生徒や保護者からひっきりなしにかかってくる相談の電話に必死で対応していました。着信音が鳴れば、夜中の2時でも3時でも電話に出て、ときには自ら出向いて、直接話を聞く。酔っ払った保護者を前にかみ合わない会話を朝まで続け、日の出と共に床に就いたこともありました。

「新米」教師ということで、保護者に軽く見られていた面もあったのでしょう。私自身、保護者に悪く思われたくないという気持ちがあったのかもしれません。

転機が訪れたのは教職に就いて8年目、現任の岡輝（こうき）中学校に赴任して3年ほど経ったころです。きっかけは、ある生徒との再会でした。ある日、前任校で担任をしていた生徒と町でばったり会いました。その生徒はもう高校を卒業しているはずだと思いながら声をかけようとした瞬間、その生徒はぱっと目をそらし、私の目の前から足早に遠ざかっていってしまったのです。

私は、何とも言いようのない寂しさに包まれました。何も「3年間お世話になりました」と、生徒にお礼を言ってほしかったわけではありません。「教師はサービス業」と言って、人一倍、生徒・保護者に尽くしたつもりでいながら、私の思いは彼らには届いていなかった――。いかに私のしていた「サービス」が、生徒のことを考えていない、独りよがりのものだったのかを思い知らされたのです。

同時に、その生徒が今、人に誇れるだけの生活を送っていないのではないか、という思いもよぎりました。もし今の自分に自信があるのなら、「就職決まったよ」「結婚したよ」などと近況を伝えたくなるはずです。生徒が胸を張って歩けるような人生を送るきっかけをつくるのが、我々教師の仕事ではないのか。私は担任として進路指導をしながら、そのことを全く意識していなかったことに気づいたのです。

それからは、生徒や保護者の要求や苦情に、単に対症療法的に応じるのではなく、常に先を見て、その生徒の将来を考えながら行動するようになりました。独りよがりの「サービス」としてではなく、私自身がどのように生徒を育てていきたいのか、「信念」を持って教育にあたることが大切だと意識するようになったのです。

中学校教師が語る 私がやりがいを感じた瞬間

現任校での日々が自分を変えた

生徒指導には教師間のチームワークが大切だと気づいたのも、そのころでした。以前はだれかが結果を出すたびにうらやましく思い、ほかの先生と違う指導をすることが、何か特別なことをしたように誇らしく感じていました。そうしたことでしか教える喜びを感じられなかった自分が、今では恥ずかしく、また生徒に申し訳ないという気持ちでいっぱいです。

今は、学校・学年団の教師が声をかけ合い、同じ方針で指導するよう心がけています。生徒に同じことを注意するにしても、どの先生が話すかによって効果が大きく変わることがあります。また、厳しく叱るべきか、話をじっくり聞くのがよいのかは、生徒それぞれの個性やその時々の状況によって異なります。教師が自分の持ち味を発揮して協力し合えば、生徒をもっと多面的に捉えることが可能だと気づいたのです。

こうした心境の変化は、本校の置かれた環境によるところが大きかったと思います。本校は県内でも指導上の厳しい課題を持った学校の一つでした。以前は、授業放棄や器物破損、喫煙が横行し、けんかも多く、ときには校舎から机が降ってくるという厳しい状況もあったと聞いています。そうした学校で指導をするうちに、自分1人では太刀打ちできない、何か大きなものと対峙(じ)しているような気持ちが強くなっていったのだと思います。

地域に、日本に、世界に、広がる思い

試行錯誤の新任時代を経て、私は2008年度で教職歴11年になりました。今は担任を離れ、生徒指導主事として指導にあたっています。

主事になって感じるのは、いかに学校が地域に支えられているかということです。民生委員や町内会長といった地域の方々とお話をするようになって初めて、いろいろと助けていただいていることを知りました。

もう一つ痛感しているのは、今、私たち教師がしている仕事は「地域の苗づくり＝地域づくり」なのではないかということです。生徒が大人になったときに、この中のだれが今の民生委員や町内会長のように地域のために汗を流せるのだろうか。「地域に貢献したい」という思いを、少しでも中学校時代に根付かせておかなければ、地域はどうなるのか。ひいては、日本は、世界は……というように、思いはどんどん広がっていくのです。

なんて責任の重い仕事なのだろう。教師という仕事に対して、つくづくそう思います。

私もいずれは異動となり、この学校を、地域を、離れるときがやってきます。それまでに、30年後、40年後にこの地域を支えるような人を育てたい。そして、何よりも生徒一人ひとりに明るい未来を築いていける力を持たせたい。その実現に向けて努力し続けることが、教師としての私を育ててくれた学校や地域への恩返しだと思うのです。

授業で作品が完成し「先生、完成したよ」と嬉しそうに報告に来る生徒の顔を見たとき。部活動の練習を黙々と頑張っている生徒が、大会で良い結果を出し、笑顔で結果を報告に来るとき。さまざまな場面で、生徒が目標に向かって努力し、最後までやり遂げ笑顔を見せてくれるときに、私はやりがいを感じます。（埼玉県／A中学校／S・T）

大学生が語る 心に残る恩師の言葉

中学生は、さまざまな悩みを抱え、教師は苦悩する生徒たちに、解決の糸口となる言葉をかける。優しく、ときに厳しいその言葉は、時を経てもなお忘れずに、生きる上での道標となることがある。今春社会人になる大学生に聞いた、『心に残る恩師の言葉』とは――。

「極端にやれ。自分で思っているほど実際は変わっていない」

部活動のバレーボールが上達せず、伸び悩んでいた際に顧問の先生に言われた言葉です。「このままでは上達しない。何かを変えなければ」と理解しつつも従来のフォームを捨てきれずにいました。そんな中途半端な態度を見られていたのです。自分で感じているほど、周囲はその「変化」を感じない。そして実際に、それほど変化していない。何か新しい変化や選択を迫られたときにいつも思い出す言葉です。（男性）

「ばかになれ！」

学年の行事を目前にして、今ひとつ本気になりきれていなかった私たちに、学年集会で先生がおっしゃった言葉です。応援や合唱などで恥ずかしがって中途半端にやるよりも、ばかになって思いきり取り組んだ方が楽しいという話でした。この先生の一言で、学年全体が一生懸命行事に取り組むようになっていきました。ばかになるというのは、まわりの目を気にせずに本気になる力だと思います。今でもこの言葉に助けられることがあります。（男性）

「泣きたいときは泣いていいんやで」

高校受験の勉強や人間関係で悩んでいた時期がありました。そのときは、授業にも全く集中できず、だれに相談すればよいかもわからず、ただまわりに心配をかけてはいけないという思いで、教室ではいつも以上に明るく振る舞っていました。そんな私に気づいた担任の先生に「悩みがあるやろ？無理に笑わんでええよ。泣きたいときは泣いていいんやで」と言われたのです。その言葉を聞き、私は職員室で号泣してしまいました。けれども、先生に思っていることを一通り聞いてもらうと、気持ちも吹っ切れて、力が入らなかった受験勉強にも集中して取り組めるようになりました。（女性）

中学校教師が語る 私がやりがいを感じた瞬間

「3年間付き合っていく場所なんだからお前の好きな高校にすればいい」

県内でも有数の進学校である男子校に行くか、それとも文化祭や体育祭など学校行事に非常に力を入れている共学校に行くかで悩んでいたとき、担任の先生からこう言われました。自分が世間体を気にしていたことに気づき、迷わず後者に決めました。そこでの高校生活は、もう一度戻りたいと思えるような楽しいものでした。また、生活にめりはりが付けやすかったせいか勉強もはかどり、志望大にも現役で合格することができたのです。あのときの先生の一言により、正しい選択ができたと思っています。（男性）

「きみの方が正しいとオレは思う」

ある先生からクラスメイトの面前で不愉快なことを言われ、思わず「ふざけるな」と叫んでしまいました。私は比較的まじめな生徒だったので、この件はすぐに職員室中の話題になり、担任の先生からも事情を聞かれました。私は、発言そのものは不適切だったと反省しましたが、考えを曲げるつもりはなかったので、自分の考えを説明した上で「謝る気はありません」と話しました。教師と生徒間のことで、自分が不利だろうと思っていたのですが、担任の先生は私の主張を理解してくれました。そして、「きみの方が正しい」とはっきりと言い、相手の先生を注意してくれたのです。対等な人と人との問題として判断してくれたことに感謝しています。（男性）

「財産持ちだな～」

テスト期間直前の自習時間に先生が机間指導しながら、よく言っていた言葉です。「失敗は財産だからな。これを基に学び直せばいいんだ」。授業中に配ったプリントやワークで、自分が間違えたところから勉強するのが、一番勉強になる。失敗を振り返るのは億劫なことだけれど、結局はそこを見直すことが最善の方法だ、と先生に教えていただきました。（男性）

「きみは、きっとできると思うんやけどな」

中学3年生の冬、成績も上がらず、志望校も決まらず、どうしたらよいかわからずに授業中に泣いてしまったことがありました。その時、先生から言われた言葉です。この一言で、「私はできるかもしれない」と信じることができました。先生とは、言葉一つで生徒と向かい合い、勇気付け、元気付けるすばらしい存在なんだな、と今振り返ってみて感じます。（女性）

「人は自分と違って当たり前。でなきゃ面白くないやろ？」

部活動の運営に関する考えの違いから、部長と副部長が対立。部全体が二つに分裂してしまい、その関係を修復するため、顧問の先生を交えて話し合いを行いました。そのとき先生は私たちに、「人は自分と違って当たり前。でなきゃ面白くないやろ？　違う考え方を受け入れて成長することが、共に〝生きる〟ってことなんやないか」とおっしゃいました。全員が「違うことを否定してはいけない」と気づき、その後は相手の考えに耳を傾けるようになりました。結果、部は再び一つにまとまりました。（女性）

自分が今まで生徒たちに語った言葉を生徒が覚えていてくれたことです。例えば、高校入試で失敗し、第二希望の高校に進学した生徒。その後の進路が気になっていましたが、教育実習生として母校を訪ねてきてくれ、「先生の言葉が支えになって頑張れた」と言ってくれたときは嬉しかったです。（滋賀県／R中学校／K・T）

中学校教師が語る 私が やりがい を感じた瞬間

前任校の運動会が今も心に残っています。不登校気味の生徒、学力不振の生徒、人間関係づくりの苦手な生徒、心の優しい生徒、しっかりしている生徒など、さまざまな生徒たちが一丸となって戦い抜いた1日。結果は、7クラス中最下位でしたが、どの生徒も満足感を得て、互いに「ありがとう」という言葉が飛び交っていました。（栃木県／K中学校／K・K）

「このしゃもじがみんなの代わりに落ちてくれたから、もうみんな大丈夫」

高校受験を控えた1月、先生が合格祈願に大きな「しゃもじ」を買ってきました。「みんなのために買ってきた」と、黒板に立てかけようとするのですが、明らかに不安定で、クラス中「落ちたらどうするんだ」とハラハラ。そして、案の定しゃもじは落下。カランカランという音が静まり返った教室に響きました。すると、先生は「しゃもじがみんなの代わりに落ちてくれたから、もう大丈夫」と、ニコリ。次の瞬間、教室は大喝采。（男性）

「時間切れになるよ」

成績が良くなかった私は、3年生になってようやく勉強に本腰を入れました。けれども、なかなか勉強する習慣が身に付きません。そんな私に、担任の先生は「時間切れになるよ」と声をかけてくれました。先生に活を入れられて勉強するうちに勉強の習慣も身に付き、第一志望校に合格できたのです。それからは何事もあと回しにしない癖がつきました。先生の少し厳しい言葉は、私の人生を大きく変えてくれました。（女性）

「大丈夫。100%出しきれ」

バスケット部に所属していた私は、いざ試合となると緊張して足がすくんでしまいました。そのとき先生はこう言って肩を叩いてくれたのです。先生がそう言うのだから間違いない、自分の実力を出しきれば後悔はしないはず、と前向きな気持ちになれました。生徒のことを観察し、その子にどのような言葉が必要かを考えてくれていた先生に感謝しています。（女性）

「横着するな！」

中学時代は部活動に一生懸命取り組みましたが、知識や技術を吸収するあまり、いつの間にか基本を忘れ、応用ばかり考えていました。私は主将なのにチームメイトと息が合わなくなり、イメージ通りにパスが通らなかったり、連係ミスが続いたりしていたのです。するとある練習試合の最中、「横着をするな！」と顧問の先生の怒声が。体育館中に響くこの言葉で、私は冷静になり、試合にも勝つことができました。この言葉は、スポーツだけでなく日々の生活にも影響を及ぼす言葉になりました。（男性）

「夢に向かって頑張っていると、毎日が楽しい」

中学時代は勉強と部活動で、忙しい日々を送っていました。そこに親との問題も重なり、自分が勉強しているのは、テストで良い点を取って、親を喜ばすことが目的か…と悩んだことがあります。そんなある日、HRで担任の先生が私たちに自分の夢を語ってくれました。先生の夢は大きな農園を開くことで、お金を貯めて少しずつ土地を購入している、と。「夢があるっていいよね。夢に向かって頑張っていると毎日が楽しいんだよなぁ」と先生はとびきりの笑顔で言いました。その笑顔を見て、私も夢に向かって頑張る充実した生活を送りたいと思い、素直に勉強に励めるようになりました。（女性）

300 Since 1979 VIEW21 創刊300号

最北最南の中学校を訪ねて

北海道

稚内市立宗谷中学校

「産業教育」を中心に地域を支える漁業を担う人材を育てる

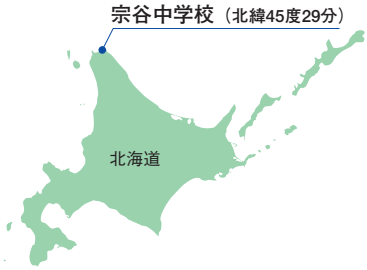
2001年に完成した校舎は開放感十分。地域のコミュニティ施設としての役割も担っている

校舎は宗谷湾に面した国道238号線沿いに建つ。2階の教室、3階の展望台から海が一望できる

3つの中学校が合併してできた宗谷中学校では、スクールバスを利用する。朝夕各1便の運行だ

授業中の生徒たちはとにかく元気。教師の問いかけに対して、答える声があちこちから上がる。人数が最も少ない1年生（9人）の教室も雰囲気はとても明るい

1年生は円になって、2年生は2列に向かい合って給食を食べる。3年生の教室は授業中と同じまま。これも学年の個性だ



学校創立直後から続く地域ぐるみの人材育成

宗谷中学校の「産業教育」は、学校創立直後から既に40年の歴史を持つ。地元の漁業を受け継ぐ人材としての基礎を養うことをねらいとし、現在は「総合的な学習の時間」の中で実施されている。主な内容は、1年生が漁労体験、2年生がタコの薫製づくり、3年生が修学旅行を利用した、薫製の販売体験など。保護者の仕事の喜びや苦労を知ることで地域を愛する心を育み、海産物がどのような人たちの手を経て流通し、消費者のもとに届いているのかまでも対象とする、文字通り総合的な学びである。

漁業、農業が盛んな北海道では、多くの地域が後継者不足に悩んでい

学校概要

昭和43年、市内の3中学校の合併により開校。住民の大半は漁業従事者で、ホタテ貝・タコ・カニなどの海産物に恵まれ、近年は安定した経営が営まれている。開校と同じ年に、「稚内市産業教育実践研究学校」に指定。「ふるさとに学ぶ産業教育」を柱の1つとして学校、家庭、地域、行政が一体となった教育を展開。

生徒数◎34人（1年9人、2年10人、3年15人）

教職員数◎15人

住所◎〒098-6754
北海道稚内市大字宗谷村字清浜

Tel◎0162-77-2019　Fax◎ 0162-77-2159

URL◎http://www.soyachu.wakhok.ac.jp/

校舎の展望台からは宗谷湾、そして晴天のときには宗谷海峡を挟んでサハリンまで見える。宗谷ではこのような展望台を設置する民家があるが、これは海に出た家族の姿を見守るためとされている。この校舎ができて以来、幸いなことに生徒の家庭に大きな海難事故は起きていない

雪でグラウンドが使えない冬場、昼休みの体育館ではフットサルの熱戦が（右）。集会などに使われる大きな吹き抜けのあるスペースにはグランドピアノを設置（下）。音楽好きの生徒がミニ演奏会を始める

国道を隔てた敷地にある水産教育実習棟。薫製実習用の魚の提供など、漁協の協力を得て漁労・水産物加工を体験。ここでつくられた薫製は、「100%宗谷」のブランドで3年生が修学旅行で販売する。販売体験後の感想では「自分が宗谷の一員であることを実感できた」などの言葉が聞かれ、生徒にとって地域と自分自身を見つめる機会になっている

稚内市立宗谷中学校
校長
安達忠勝
Adachi Tadakatsu

地域に生きる子どもたちを、地域と共に育てる。それは中学校に課せられた使命だと私は思います。事実、本校の保護者の学校行事への参加率は極めて高く、学校への期待と要望の大きさを感じます。地域全体で子どもを育てようという意識を持った校区なのです。

近年、教師の業務量は確実に増加しており、日々の授業や部活動と同時に産業教育を行っていくのは簡単なことではありません。しかし、40年に渡って受け継がれてきた伝統は本校の宝であり、学びの基本です。今後は教科学習と結び付けていくことも視野に入れ、発展させていきたいですね。生徒1人ひとりはとても明るく、元気です。そのパワーを集団のために積極的に生かせる人材を育てることも、私たちのできる地域貢献だと思います。

多くの生徒は小学校で複式学級を経験していることもあり、学年、男女の区別なく仲が良い

「あとだれが乗る?」と教職員が生徒に声をかける。乗り遅れては大変

る。だが、ホタテ貝の養殖などが成功し、安定した産業として定着したこの地域では状況は異なる。宗谷中の男子生徒のほとんどは将来、家業を継ぐことを希望し、女子生徒も「漁師と結婚して仕事を手伝いたい」と自分の将来を両親の姿に重ねる。

地域の将来を担う人材の育成は、課外活動でも重要なテーマだ。宗谷中の水産部では、水産資源の保護の観点から、地元漁協の協力を得ながら特産であるホッカイシマエビの飼育・養殖に挑戦を続けている。

平成20年には、宗谷中の初代校長を招き、講演会を開催。生徒たちは、産業教育が始まった当時の地域の思いなどを聞き、親や兄姉から受け継いだ地域ならではの伝統のすばらしさと、漁業の町の未来を担う者としての誇りを改めて感じた。

生徒、家庭、そして学校が一体となって、地域に根ざした宗谷中の学びをこれからもつくり続けていく。

300 Since 1979 VIEW21 創刊300号

最北最南の中学校を訪ねて

沖縄県

竹富町立波照間中学校

15歳の独り立ちに向け教師全員で見守り生きていく力を育てる

1年生は男子のみ。おしゃべりをすることもなく、教師の説明にじっと耳を傾け、黙々と数学の問題を解く

体育は3学年合同で実施。この日はハンドボール

毎朝、生徒は交替で正門前に立ち、大きな声で挨拶

3年生の英語の授業。先日行われた石垣島での陸上競技大会についての感想を英語で述べ合う

隣接する小学校と共用の食堂で給食を食べる

学校の敷地内では5頭の山羊を飼育する。生徒の課外活動費の貴重な財源となる

離島という環境でたくましく育つ

八重山列島の中心である石垣島と波照間島とを結ぶ主要な交通手段は、朝、昼、夕の定期高速船。しかし、海が荒れれば、船は欠航する。そのため、部活動の大会や校外学習に参加する際、荒天を避けて生徒は前日、前々日から移動することもある。生徒には自ずと「何でもできるときにやっておく」先回りの行動が身に付く。日々の授業の準備や掃除でも、生徒は教師の指示を待たない。その積極的な姿勢は、同校に初めて勤める教師を驚かせる。離島という環境が生徒をたくましく育てているのだ。

しかし、そうした環境は、課題も与える。島には保育所から中学校まで一つずつ。子どもはずっと一緒に

学校概要

昭和24年に波照間小中学校として開校し、昭和50年に波照間中学校へと分離独立。波照間島は石垣島からおよそ60km、定期高速船でほぼ1時間の距離にある、周囲約15kmの日本最南端の有人島。離島の中学校として金銭教育や環境教育、開かれた学校づくりに積極的に取り組む。

生徒数◎18人（1年3人、2年6人、3年9人）

教職員数◎14人

住所◎〒907-1751
沖縄県八重山郡竹富町字波照間50

Tel◎0980-85-8454　Fax◎ 0980-85-8186

URL◎http://www9.ocn.ne.jp/~hatyu/

サトウキビの植え付け後、学校まで約4kmを走る。陸上部の練習が始まった

生徒たちは春夏はバドミントン部、秋冬は陸上部として活動する

地域の伝統文化を学ぶことは、「総合的な学習の時間」のテーマの1つ。舞踊と楽器に分かれて練習する

練習には地域の演奏家が指導者として参加。島に伝わる文化を次世代へとつないでいく

教室の窓からサトウキビ畑が見える。窓を大きく開け放しても、聞こえてくるのは風が通る音だけだ

毎年秋にはPTAの協力を得てサトウキビの植え付けを行う。収穫はおよそ2年後。これで得た収入も、生徒の課外活動時の船代などの一部に充てられる

竹富町立波照間中学校
校長
友利　宏
Tomori Hiroshi

本校の生徒は、卒業と同時に親元を離れることになります。ですから、1人暮らしや寮生活について高校生の先輩から話を聞いたり、銀行口座をつくって家計を管理する力を身に付けたりして独立に備えなければなりません。これらの教育は離島ならではであり、生徒にとってはまさに「生きる力」を培うものです。

生徒たちは幼いころから兄弟・姉妹のように育ってきていますから、1年生から3年生までとても仲良しです。しかし、その分、自分と違う考えの人や自分と合わない人と向き合うことが稀です。自分の考えを主張しながら、異なる考えも受け入れていく体験をさせることも、15歳での独立に向けて、学校がなすべき大切な教育だと思っています。

育つため、人間関係は固定しがちだ。そのせいか、生徒は改まった自己主張が苦手だ。教師は、スポーツ大会や英語スピーチなど、ほかの中学校の生徒と交流できる機会を探し、なおかつ船代などの交通費の補助があるものを見付けては参加を勧める。

生徒の生活には確かに離島ゆえの制限がある。では、生徒に対する最大の支援は何か。同校が出した答えは「全員で見守る」だ。「総合的な学習の時間」も部活動も、放課後のサトウキビの植え付けも、校務分掌の担当を超えて可能な限り全教師で生徒を見守り、共に活動する。週末の陸上競技大会には、顧問以外も手弁当で高速船に乗り込み、応援する。

夕暮れどき、校務の合間にグラウンドに姿を見せた教師たちが、部活動に励む生徒に思い思いの声援を送る。近くに住む「おばあ」が作りたての総菜を差し入れに訪れる。人口およそ600人の小さな島の中学生には、たくさんの温かな視線が注がれている。

文学座附属演劇研究所

人に興味を持ち、人の話を聞くことが俳優としての第一歩

いい演技に求められる他人への関心

創立以来、70年以上の長きにわたって日本の演劇界をリードしてきた文学座。若手俳優の育成に力を注いできたこの劇団は、創立当時の理念を確実に継承しつつ、常に現代人の生活感情に根ざした芝居を上演し続けてきた。伝統を守りながらもいつの時代にも実力派として認められる俳優をどのように育ててきたのか、東京・信濃町の文学座附属演劇研究所で話を聞いた。

俳優養成はセリフ回しから始まる

文学座は、日本の近代演劇史を象徴する存在であると同時に、現在でもわが国演劇界の中核に位置する劇団だ。加藤武、江守徹といった有名俳優を筆頭に多くの演劇人が輩出し、付属する演劇人の養成機関である文学座附属演劇研究所（以下、研究所）では、今もプロの俳優を目指す多くの若者が学ぶ。創立に際して起草された文章の中に、次のような言葉がある。「内に於いては、名実ともに現代俳優たり得る人材の出現に力を尽くしたいのであります」（1938年試演プログラムの『文学座創立について』より）。

この言葉の通り、文学座は設立の翌年に研究所を開設した。現在の研究所は本科（1年間）と研修科（2年間）に分かれており、本科の受験資格は18歳以上。例年、300名を超える受験者の中から60名が合格する。合格者の平均年齢は20代前半。高校を卒業してすぐに入所する者ばかりでなく、大学生、大学中退者、社会人経験者、他劇団の経験者などが集まる。研修科に進めるのは、このうちわずか15名程度。

研修科を卒業すると、その中でさらに選抜を通った者だけが座の見習いである準座員になれる。その後、正式な座員となるにはさらに2年が必要だ。採用されるかどうかは、実力はもちろんのことながら、その時、座が必要とする個性を持っているか否かにも大きく左右される。座員になれるのはほんの一握りというわけだ。しかし、だからといって研究所を途中で去っていく者はほとんどおらず、また卒業後も演劇から遠ざかる者は少ない。研究生たちは、授業の合間を縫いながら、授業料を稼ぐため日々アルバイトに精を出している。

研究所のカリキュラムは、本科の場合、月曜から土曜まで1時間半の授業が1日に2コマずつ。授業の内容は戯曲をベースにした芝居の稽古に、体操、音楽、殺陣の

文学座附属演劇研究所 Profile

文学座附属演劇研究所の母体である文学座は、1937年、3人の文学者、岸田国士、久保田万太郎、岩田豊雄によって設立された。文学者が設立し、文学作品を演目の中心に据えてきたことが、文学座という座名の由来だ。森本薫、三島由紀夫、有吉佐和子など国内の優れた文学者の作品を上演する一方、カミュやサルトルなどの作品にいち早く取り組むなど、前衛性の高い演目にも積極的に挑戦してきた伝統を持つ。研究所は文学座が運営する俳優養成機関。現在のように毎年研究生の募集を行う学校形式になったのは、1960年からである。

文学座代表幹事・文学座附属演劇研究所所長
戌井市郎（左）
いぬい・いちろう　演出家。文学座創立メンバー。研究所所長として若手育成に尽力。

文学座附属演劇研究所主事
鵜澤秀行（右）
うざわ・ひでゆき　俳優。研究所7期卒業生。現在、後進の指導に当たっている。

文学座附属演劇研究所

人に興味を持ち、人の話を聞くことが俳優としての第一歩

いい演技に求められる他人への関心

稽古が週に3コマ。卒業公演を含めて年に3回の発表会を行う。研修科に上がると、週に3コマの必修科目（体操、音楽、ダンス）以外は、発表会に向けた稽古が中心で、1日6時間程度で1か月半ほど続く。発表会は年4回行われる。

稽古の中で、最も重視されるのはセリフだ。戌井市郎研究所所長いわく、「文学座は文学を原点とする劇団ですから、授業では言葉、つまりセリフ回しを最も大切にします。現代人の生活感情に根ざした舞台は、リアリティのあるセリフ回しによってこそ成り立つもの。本科では、ともかく観客に伝わるセリフを舞台の上で喋れるようになることを目指します」。

文学座の座員はセリフがうまいとの評判が高く、声優としてのニーズも多いが、この点に劇団の出自が関係しているというから面白い。鵜澤秀行主事が平田オリザの言葉を借りていうには、プロレタリアート劇団として出発した劇団の場合、セリフ中の"主張したいこと"を強調する稽古をするため、"強弱"でセリフを喋ることになる。

一方、芸術至上主義を標榜してきた文学座の場合、日常的な、自然な口調で喋る訓練を受けるため、"高低"で喋ることになり、聞く者の耳に入りやすいのだという。研究生たちは、稽古で訛りの矯正や標準語のアクセントの習得を徹底的に指導される。自身、研究所の卒業生でもある鵜澤主事はいう。「ここまで徹底的にセリフの指導をするところは、他の劇団の研究所にはないでしょう。『へえ』という返事一つを、1日かけて指導されたこともありますよ」。

欠点を具体的に伝える指導方法

セリフを中心にした演技の指導方法にも、文学座独特の伝統がある。

「研究所では、座学よりも実技を中心とした授業を行っています。また、指導する際にも、抽象的な論理を教えることはありません。あくまでも具体的に、例えば『腹から声を出せ』などと指導します。ただし、一つの型にはめこむために指導をするのではありません。ともかく自由にやらせてみて、直すべきところを指摘するだけ。これは、創設以来70余年間変わらない伝統です」（戌井所長）

「演出家は、決して『こういう言い方をしろ』とはいいません。北村和夫さんがよく、『ともかくやってみる、言ってみる、動いてみる』とおっしゃっていましたが、積極的に恥をかけというのが文学座の伝統。恥をかくことを恐れずに、自分の考えたことを演出家にぶつけていくことが必要不可欠です」（鵜澤主事）

実際の授業風景を覗いてみると、研修科の発表会の演目である『雨空』（久保田万太郎作）の稽古が行われていた。指導に当たる戌井所長は、和服を着た一組の男女の会話の場面で、男性役者のセリフに「もっとサラリと」「自然にいってごらん」と短い言葉で何度もやり直しをさせている。男性は、その都度少しずつ言い方を変えていく。直されなくなって、ようやく次のセリフへと進む。延々とその繰り返し。手取り足取りの指導とはほど遠く、一見、冷淡にさえ見える。

戌井所長は「演技というのは演出家にいわれた通りのことをやればいいわけではありません。自分で考えることが必要です。何度同じことをいっても、セリフ回しを含め、場面に合った演技が永遠にできない研究生もいます。そうなるとダメなものはダメとしかいえませんね」と語る。

ある研究生はいう。「厳しいとは思いません。役者を目指しているのは自分ですから、やり直しさせられてそれをクリアできなければ、自分は役者になれないんだと思うだけです。成長するには自分で歩くしかない」。

芝居を通して人間関係を学ぶ

鵜澤主事は、最近入所してくる若者たちの様子を見ていて、気にかかることがあるという。「核家族で育ったせいでしょうか、お年寄りや小さな子どもに触れずに育ってきている子が多く、全体的に、人と交わるのが苦手な子が多いようです。生身の人間に対する興味が薄い印象を受けます」。

しかし、芝居は複数の人間がつくり上げていくもの。否が応でも人と関わらなければできない。

「役者に必要なのは他人への関心ですね。舞台でも他人の演技に興味を持てなければ、いい演技はできません」（鵜澤主事）

ある研究生は、「今でも喋ることは苦手なのですが、研究所に入ってから、『相手のセリフを聞いたふりをするな。本当に聞いて、自分の言葉として本当に伝えろ』としつこく指導されてきました。これを舞台でやるのはまだまだ難しいのですが、少なくとも、人の話を聞こうとする努力だけはできるようになったと思います」と語る。

また、研究所に入るまで友達をほとんどつくれなかっ

研修科の発表会『雨空』の稽古風景

たというある研究生は、当初、複数の人間と密接に関わりながら一つの芝居をつくり上げていくことが、とても苦痛だったという。

「私は不器用なので、人付き合いがなかなかうまくできないんです。でも、芝居の稽古を積んでいくうちに、あることに気付きました。それは、こちらが楽しく演じられたときは、相手役も『今日は楽しかったね』といってくれることです。相手役は自分を映す鏡なんですね」

「当然ですが、他人がいてこそ芝居は成り立ちます。役者には独りよがりでない、他人を顧みることも求められるのです」（戌井所長）

最後に、戌井所長は役者に必要不可欠な資質として、「創意」と「忍耐」の二つを挙げた。

「何事もそうですが、実力というのは一朝一夕で付くものではありません。特に実力ある役者になるためには、日々の稽古がものをいいます。私自身を含め、研究所で研究生の指導に当たっている者は、常に芝居における新しい時代をつくっていけるような、スター性のある新人を世に送り出すことを目標に、やりがいを感じて取り組んでいます」

プロの役者になれるのはほんの一握りかもしれないが、研究生は芝居を通して貴重な経験を積んでいる。ある研究生に、「いい役者の条件とは？」と尋ねてみると、こんな答えが返ってきた。

「芝居のうまさも大切ですが、最後は、人間的な魅力であることが分かってきました」

明日から使えるICT講座

第4回　情報モラル教育

ネットの功罪を子どもや保護者と共に考える

携帯電話やパソコンを通して子どもが巻き込まれる事件が頻発し、情報モラル教育の重要性が叫ばれています。一方で、子どもの世界で何が起きているのか大人には見えにくく、どのように指導したらよいのかわからない、という声もよく聞きます。そこで、今、情報モラル教育を行う上で押さえるべきテーマを指導例と共に紹介します。

講師　中川一史（ひとし）先生

独立行政法人メディア教育開発センター教授。数多くの小・中学校で指導・助言を行っている。

「人の嫌がることはしない」を授業で実感させる

情報モラル教育は、一言でいうと「人の嫌がることをしない」と教えることです。パソコンや携帯電話の所持・使用の規制だけでは、抜本的な解決にはなりません。これらの使用を前提とし、気持ちよく使うために何が必要かを考えるのが大切です。

授業で生徒自身が体験し、考えることで、現実の場面でも対応ができるようになるのです。授業参観などの機会を利用し、保護者にも一緒に考えてもらえるとよいですね。

情報モラル教育で必ず押さえたい3つのテーマ

	【趣旨】	【指導例】
情報リテラシー	目的に沿って適正な情報を探し、活用できる能力を身に付ける。	●新聞／ホームページ作成 新聞やホームページを作成する体験を通して、文章と画像の適切な組み合わせを学ぶ。視点が異なれば、同じ情報でも異なる印象の記事になることを学ぶ。 ●ディベート 1つの話題を別の側面から主張することを練習し、視点の違いにより情報の受け止め方が異なることを学ぶ。
著作権・肖像権など	情報には作成者の権利があること、それを尊重することを知る。	●著作権とは何か 著作権とはどのような権利かを知り、意見や文章、画像などの引用方法を学ぶ。 ●写真の撮影と利用 人物の写真を新聞やインターネット上で使用する場合に気を付けなければならないことを知り、人格権・肖像権について学ぶ。
ルールとマナー	パソコンの画面の向こうにいる人の存在を意識し、配慮できる力を身に付ける。	●メールの基本マナー 携帯電話やパソコンのメール機能を使ってやりとりする場合の、相手を不快にさせない言葉遣いやファイルの正しい添付法、受信者の意向にかかわらず一方的に送られてくるスパムメールへの対処法など、基本的なマナーを学ぶ。 ●インターネットの迷惑行為 学校裏サイト、ブログ、プロフ（自己紹介ページ）などの書き込みをきっかけとしたいじめ、言葉だけのやりとりから生じる誤解などの存在と原因を知り、対応の仕方について考える。

活用度UP！｜ワンポイントアドバイス

教科の授業の中でも情報モラル教育を！

情報モラル教育は、「情報モラルの授業」として行うだけでなく、日々の教科の授業で具体的な活動をする際にも触れることが重要です。例えば、「総合的な学習の時間」でディベートを行うときに視点の違いにより情報の受け取り方が異なることを伝えたり、調べ学習をするときに著作権について考えさせたりすることが非常に有効です。

また、情報モラルにおいては、「言葉」がとても大切です。メールや掲示板等でのやりとりも、「言葉尻」で問題が起こることが多いのです。各教科で言語、表現の大切さを教えることは、情報モラル教育でもあるのです。

「ルールとマナー」の指導例

インターネット上の掲示板を疑似体験させる授業

1 インターネットの掲示板機能を再現できる教育ソフトを使って、掲示板を通したコミュニケーションを体験する。教師と生徒、あるいは生徒同士で、架空の人物を演じ、相手をだます、不快にさせるなど、あとで議論を行うための書き込みを擬似的に行ってみる。

2 掲示板を使用する疑似体験を基に、「実際に会う」ことと「電話で話す」こととの違いを踏まえて掲示板の特徴について話し合い、掲示板の危険性について理解させる。「相手についてわかること」「言葉から受ける印象」など、ポイントとなる部分を教師があらかじめ伝え、それを基に話し合うと、生徒も理解しやすい。

ポイント

- 掲示板を再現するソフトを用いることが難しい場合は、不快な表現等を含んだ掲示板上でのやりとりを紙に書いておき、それを基に話し合いを行ってもよい
- 現実の場面に直面したときに、「ちょっと待てよ」と思えるよう、現実に起こりそうな失敗を、授業等で体験させておく

情報モラル教育に役立つサイト

Benesse教育研究開発センター
「携帯電話の利用実態」
http://benesse.jp/berd/
→HOME＞教育フォーカス＞調査データクリップ！ 子どもと教育＞携帯電話の利用実態

携帯電話が小中高生の生活に与えた影響や、知らない人からのメール受信経験の有無など、携帯電話をめぐる現状について、さまざまなデータを見られます。

Benesse教育研究開発センター
「子どものICTメディアの利用実態　調査レポート」
http://benesse.jp/berd/
→HOME＞調査・研究データ＞子どもとICT・メディアについて＞子どものICTメディアの利用実態

パソコンと携帯電話について、小中学生の使用実態や意識と共に、保護者が感じているメリット・デメリットなどもわかります。

総務省　情報モラルICTメディアリテラシー教材
「伸ばそう　ICTメディアリテラシー」
http://www.ict-media.net/

小学校高学年向けですが、ブログやメール、チャットなどのやりとりを安全・リアルに体験できる「ICTシミュレーター」や指導案が用意されています。

＊上記の情報は、すべて08年12月現在のものです

平成19年度文部科学省委託事業 情報モラル指導ポータルサイト
「やってみよう情報モラル教育」
http://kayoo.info/moral-guidebook-2007/index.html

情報モラル教育の実践例やモデルカリキュラム、インターネットや携帯電話の利用実態調査など、すぐに役立つ情報が豊富です。

文部科学省
「“情報モラル”授業サポートセンター」
http://sweb.nctd.go.jp/support/index.html

情報モラル指導の実践事例が動画で見られます。

文化庁
「これであなたも著作権何でも博士〈学校関係者向け著作権の教育情報〉」
http://www.bunka.go.jp/chosakuken/hakase/

著作権に関する学習資料やソフトをダウンロードできます。

(財)インターネット協会
「インターネット　ルール&マナー検定」
http://rm.iajapan.org/

インターネットを利用するために知っておくべきルールとマナーの知識について、検定試験を通じて測定。「こども版」「ビジネス版」などがあります。

(財)コンピュータ教育開発センター
「ネット社会の歩き方」
http://www.cec.or.jp/net-walk/

オンラインショッピングの仮想体験ができるページ等があります。

壁に突き当たったときの“原因探し”や“謎解き”が研究の醍醐味

URA AKIRA
(株)日立製作所フェロー　日本学士院会員
外村 彰

DNAや原子はもちろんのこと、0.5オングストローム（1億分の5㎜）というミクロの世界の観察を可能にし、だれも見たことのない高温超伝導体中の磁束量子の観測を実現させた「1MVホログラフィー電子顕微鏡」。この世界最高の性能を誇る電子顕微鏡の開発に成功し、物理学の常識を塗り替える数々の業績を残してきた外村彰氏。その原点は幼少期に抱いた好奇心にあったという。

「電子の波を見たい」と物理の道へ

思い起こせば、小学校のころから自然現象を見ることが大好きでした。自然の面白さを教えてくれたのは担任の先生です。先生に連れられ自然観察に出かけ、昆虫に近付いてそれらが動く様子を観察したり、川の流れを眺めたりしたことを、今でも覚えています。外で遊ぶことが好きでしたが、体が弱かった私は家で寝ていることもよくありました。そんなときでも天井の美しい木目を眺めたり、雨の日は庭の水と雨粒がそこにつくる波紋を見たりしては、奇麗だなと思っていました。

中・高校時代になると、数学や物理のように答えのはっきり出る教科が好きになっていきました。物理では、太陽や月がどんな動き方をしているのか、飛行機から飛び降りたらどんな速さで落ちていくのかといったことが、たった一つの法則で計算によって正確に予測できます。私は、それがとても面白かったのです。中でも大学3年生のときに習った量子力学にとても魅力を感じました。電子は粒子だと思っていたのですが、授業で「電子は波だ」と教えてもらい、「本当に電子が波ならば、その形をこの目で見たい」と考えるようになりました。少年のときに見た水溜まりの波紋のような美しさがあるのではないかと思ったのです。

ミクロの世界に魅了されて

日立製作所に入社してからは、電子が波である性質を利用した新しい結像法である「電子線ホログラフィー」の実用化に取り組みました。電子線ホログラフィーとは、電子線を物体に当ててつくられた像をフィルム（ホログラム）に記録し、そのフィルムに光を当てて三次元像をつくる技術のことです。私たちは、電子線ホログラフィーを実証できれば、性能の限界に近付いていた電子顕微鏡の可能性が広げられ、これまで見られなかったミクロの世界が観測できると考えたのです。

入社3年目には、研究所の先輩のサポートもあり、電子線ホログラフィーの可能性を実証する実験を成功させることができました。それは、大学時代に抱いていた「電子の波を見たい」という夢を実現させる実験でもありました。電子の波紋を見たときの感動は、今でも忘れられません。少年のときに心を動かされた水の波紋とそっくりな電子の波が、そこにはあったのです。

しかし、この電子線ホログラフィーを利用した電子顕微鏡では、物体を撮影するのに10分という長い時間を要するため、実用には向きませんでした。時間を短縮し実用化させるには、明るくて、乱れのない電子線が必要でした。しかし、何度試しても電子線に乱れが

生じてしまいます。私たちは大きな壁に突き当たったのです。

電子線を発生させるには金属の針を用います。この針は髪の毛よりも細く、振動や磁場などの影響を非常に受けやすいものです。私たちは研究所内をくまなく調べ、妨げになる振動や磁場を除いていきましたが、それでもうまくいきません。最後には研究所の外まで疑い始め、もしかすると近くを通る電車が、原因ではないかとまで考えるようになりました。そこで、仲間の1人が研究所の12階に上がり、電車の往来を実験室に逐一電話で知らせました。最初は因果関係がつかめませんでしたが、粘り強く観察していくと、終電が去ったあと、揺れはなくなることがわかったのです。

それから数か月経ったある日、自分の目を疑うほどの結果が出ました。電子線の証拠である、明るく乱れのない縞模様が今まで見たことがないくらいたくさん蛍光板上に現れたのです。電子線ホログラフィーが実用レベルに達した瞬間でした。このとき、私たちが電子線ホログラフィーの研究を始めてから10年以上の月日が流れていました。

好奇心が夢をかなえる原動力になる

今までにない新しいことや、だれにもできなかったようなことをしようとするとき、すぐに成功することはまずありません。必ずと言ってよいほど、壁に突き当たります。私が電子線ホログラフィーの開発をしたときも同様でした。しかし、わたしは悲観しませんでした。むしろ「やっと面白くなってきたな」と思ったものです。なぜなら、その〝原因探し〟や〝謎解き〟こそが、研究の醍醐味だと思うからです。物理は論理的で、絶対に答えが出るものです。なぜ壁にぶつかったのか、その原因さえ突き止められれば、あとは努力次第で必ず解決することができるのです。そして、努力し続ける原動力になるものは、「好奇心」だと思います。アインシュタインは「光に近いスピードで走りながら、光を見たらどうなるのだろう」という疑問を突き詰めた結果、相対性理論をつくり上げました。私も子どものころの水溜まりにできた波紋を見て「奇麗だな」と感じた体験が原点になり、「電子の波があるなら見てみたい」と思って、40年以上も研究を続けてきました。

学生時代は目の前の勉強や試験に追われ、子どものころのわくわくした気持ちを忘れてしまいがちです。しかし、是非好奇心を忘れないでいてほしいと思います。その好奇心が、壁を乗り越え自分の目標や夢をかなえる原動力となるのですから。

とのむら・あきら　1942年兵庫県生まれ。東京大理学部物理学科卒業。工学博士、理学博士。(株)日立製作所中央研究所入社以来、電子線装置の開発、応用研究に従事。現在は、(株)日立製作所フェロー（特別研究員）であり、理化学研究所、沖縄科学技術研究基盤整備機構で活躍。日本学士員会員。82年仁科記念賞、02年文化功労者顕彰ほか受賞多数。主な著書に『量子力学を見る』、『量子力学への招待』（いずれも岩波書店）などがある。

◎本コーナーに登場する研究者は日本学士院の会員の方々です。日本学士院は、学術上功績のあった科学者を優遇するための機関で、人文科学70名、自然科学80名が在籍し、新会員の選定、公開講演会などの活動を行っています。会員に選定されることは研究者として名誉なこととされ、また日本学士院賞は我が国の学界では最も権威ある賞として、毎年初夏に行われる授賞式には天皇皇后両陛下がご臨席されます。http://www.japan-acad.go.jp/

『VIEW21』中学版　バックナンバー　特集一覧（2007年1月号～）

最新号およびバックナンバーの記事は、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。
知りたいテーマ別に記事を検索できるようになっていますので、ご活用ください。

2008年 秋号

【生徒指導】
行事で育てる高め合う生徒

【新学習指導要領】
これからの理数教育

【キャリア教育・進路指導】
3年秋からの進路指導

2008年 夏号

【キャリア教育・進路指導】
教科で進める「キャリア教育」

【新学習指導要領】
事例で見る「言語活動」の取り入れ方

【生徒指導】
大人の知らないケータイの世界

2008年 春号

【生徒指導】
つながり、深める「部活」指導

【新学習指導要領】
新学習指導要領、ここが変わる

【キャリア教育・進路指導】
職場体験の実践ポイント

2008年1月号
データでひもとく学習指導の「いま」と「これから」
「確かな学力」を育成するために改善すべき点など、学習指導の在り方を考える。

2007年9月号
つながる「保護者」と「学校」
学校と保護者が協力して子どもを育てる大切さを改めて考える。

2007年7月号
生徒が変わる「キャリア教育」
「キャリア・スタート・ウィーク」の本格実施に向けて、実践例を紹介。

2007年4月号
カリキュラムから考える小中連携
「中1ギャップ」への対応策を、小・中学校の実践事例などから考える。

2007年1月号
「学びに向かう」生徒をどう育てるか？
生徒の学ぶ意欲を高めるための具体的な対応策を考える。

ウェブサイトでは2003年度分から掲載しています。

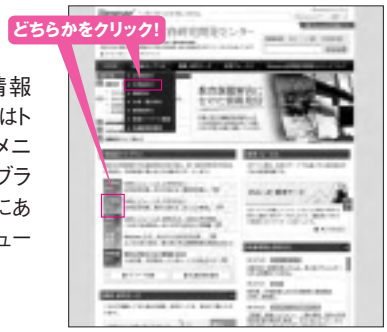
Benesse教育研究開発センターのアドレス

http://benesse.jp/berd/

または　ベネッセ　研究　で　検索

バックナンバー記事へのアクセス方法

1
トップページの左側「情報誌ライブラリ」の下（またはトップページ上部の黒いメニューバー上「情報誌ライブラリ」プルダウンメニュー）にある「中学校向け」のメニューをクリックします



2
画面が切り替わるので、画面左側の「中学校向け」の下にある「バックナンバー」の文字をクリックします

3
『VIEW21』のバックナンバーの目次が発刊年度ごとに表示されます。発刊年度の切り替えは、表紙写真の上にある各年度の文字をクリックします

＊アクセス方法は08年12月現在のサイトを基にご案内しています

巻頭綴じ込み「中学校教育60年間の歩み」

【参考文献】
◎文部科学省「平成20年度学校基本調査速報」「学制百年史」「学制百二十年史」「わが国の教育の現状」「わが国の教育水準」「中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会 第4期第3回資料」
◎教育情報ナショナルセンター（国立教育政策研究所教育研究情報センター）「過去の学習指導要領」
◎内閣府「経済白書／経済財政白書」
◎厚生労働省「厚生労働白書（平成18年版）」
◎全日本中学校長会「中学校教育六十年」
◎社団法人日本フランチャイズチェーン協会「FC統計調査」
◎総務省　情報通信統計データベース「携帯・PHSの加入契約数の推移」

【写真提供】
毎日新聞社、読売新聞社、日本マクドナルド（株）

VIEW21中学版　2009　冬号　　2009年1月23日発行／通巻第300号

発行人　新井健一
編集人　原　茂
発行所　（株）ベネッセコーポレーション　Benesse教育研究開発センター
印刷製本　大日本印刷（株）
編集協力　（有）ペンダコ
執筆　柴崎朋美、中丸満、山口慎治、山田清機
撮影　荒川潤、川上一生、川本聖哉、ヤマグチイッキ
イラスト　タコリトモコ、西谷久

お問い合わせ先　VIEW21編集部
〒163-1422　東京都新宿区西新宿3-20-2　東京オペラシティタワー22階
電話　03-5371-1238

©Benesse Corporation 2009